

木原遺跡

発掘調査報告書

1993

山形県
山形県教育委員会

木原遺跡
発掘調査報告書

平成5年

山形県
山形県教育委員会



調査区完掘状況

序

本書は、平成4年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した木原遺跡の調査成果をまとめたものです。

木原遺跡は日本海に面した庄内平野北辺の遊佐町に所在します。遺跡周辺は雄大な鳥海山をはじめとする豊かな自然が残されるのどかで静かな田園地帯です。

調査では建物跡をはじめとする古代の遺構群が多数姿を現しました。その内容は本報告書に書き留められた通りです。自然地形に沿って配置された建物跡やこれらを取り巻く井戸跡、土壙、烟跡などが特徴となるものです。

遺跡は一度壊してしまえば二度とは元に戻らないものです。埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造した貴重な国民的財産で、調査により明らかにされた内容は過去の村や生活の有様を彷彿と再現してくれるものでした。

こうした祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと伝え残していくこととは、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務の一つと考えます。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りを進めるために、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整を計りながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

山形県教育委員会教育長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は山形県農林水産部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成4年度に実施した
県営圃場整備事業（月光川下流地区）に係わる「木原遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成4年5月11日から同年7月27日までの延べ55日間行った。
- 3 遺跡の所在地は山形県飽海郡遊佐町大字宮田字木原である。
- 4 調査体制は下記の通りである。

調査主体　山形県教育委員会

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　事務局長補佐　佐々木洋治

主任調査員　野尻　侃

調査員　阿部　明彦（現場主任）

調査員　植松　暁彦

事務局　事務局長　深瀬　征二

事務局長補佐　鈴木　常夫

主任事務員　永井　健郎

事務局員　渋江　正義・松本　明美・高橋　由佳・志田　恵子
大内千賀子

- 5 発掘調査にあたっては遊佐町教育委員会、山形県農林水産部農地建設課、庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区、庄内教育事務所などの関係機関にご協力を得た。

- 6 本書の作成は阿部明彦・植松暁彦が担当した。本文は阿部・植松が協議を行って両名で執筆した。挿図の作成にあたっては小沼末子、進藤純子、尾留川道子、市川則子、斎藤妙子、佐藤智美、戸部奈津子の補助を得た。

- 7 編集は安部寅が担当し、全体を佐々木洋治が総括した。

凡　　例

- 1 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原1970)を使用した
- 2 本書で使用した分類記号は下記の通りである。

S B…建物跡、E B…掘り方、S K…土壤、S D…溝状遺構、S P…ピット、S X…性格不明の落ち込み、S A…柱列、R P…登録した土器、R Q…登録した石製品
- 3 掘図中の方位は磁北を示している。遺構挿図は1/10、1/20、1/40、1/60で採録し、各々にスケールを示した。

また、図版の遺物のうち、単体の土器は1/6、井戸枠などは約1/10で提示した。
- 4 遺物は原則として1/4以上残存するものを実測対象としたが、壺・鍋等大型の器種については、1/4以下のものも対象とした。実測図の中で、断面白ヌキは須恵器・土師器・施釉陶器であり、右下に小ドットの付されているものはあかやき土器を表わしている。また、土器の内外面に網点のスクリーンが施されているものは黒色化処理の施されたものである。なお、遺物番号は挿図、写真図版とも共通し、本文中においてもこの番号を踏襲した。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査の概要	3
IV 遺跡の概観	
1 立地と層序	4
2 遺構と遺物の分布	4
V 検出遺構	
1 堀立柱建物跡	7
2 井戸跡	11
3 土 壤	13
4 落ち込み遺構	15
5 犦状溝跡	15
6 B区の遺構	15
VI 出土遺物	
1 土器土器組成	24
2 木製品・土製品・石製品	36
VII まとめ	37

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	A区調査区位置図	3
第3図	遺構配置図	5
第4図	S B 1 建物跡・S A 1・2 柱列跡	8
第5図	S B 2・3 建物跡	9
第6図	S B 4 建物跡	10
第7図	S E 30・782井戸跡	12
第8図	S E 396・708井戸跡、S K 302・7 土壙	14
第9図	S K 304・935・504・114土壙、S X 938・977落ち込み遺構	16
第10図	遺構平面図(1)	17
第11図	遺構平面図(2)	18
第12図	遺構平面図(3)	19
第13図	遺構平面図(4)	20
第14図	遺構平面図(5)	21
第15図	遺構平面図(6)	22
第16図	B地区遺構平面図	23
第17図	遺物実測図(1)	26
第18図	遺物実測図(2)	27
第19図	遺物実測図(3)	28
第20図	遺物実測図(4)	29
第21図	遺物実測図(5)	30
第22図	遺物実測図(6)	31
第23図	遺物実測図(7)	32
第24図	遺物実測図(8)	33
第25図	S E 782東西辺板材実測図	34
第26図	S E 782南北辺板材実測図	35

图 版 目 次

- 图版1 调查区完掘状况
- 图版2 调查区完掘状况他
- 图版3 调查区近景·粗掘状况·面整理状况·遗構精査状况·現地説明会他
- 图版4 S B 1 完掘状况他
- 图版5 S B 2、3·S B 4 完掘状况
- 图版6 S B 2 E B 752、753·S B 3 E B 1006·S B 4 E B 2046他
- 图版7 S E 782完掘状况他
- 图版8 S E 30·S E 396·S E 708完掘状况他
- 图版9 S K 302完掘状况他
- 图版10 S K 304完掘状况他
- 图版11 S K 7完掘状况他
- 图版12 S K 935·S K 540·S H 114·S H 112·S K 817·S K 13完掘状况他
- 图版13 S X 938、977遺物出土状况
- 图版14 略状遺構完掘状况他
- 图版15 B 区完掘状况他
- 图版16 出土遺物(1)
- 图版17 出土遺物(2)
- 图版18 出土遺物(3)
- 图版19 出土遺物(4)
- 图版20 出土遺物(5)
- 图版21 出土遺物(6)
- 图版22 出土遺物(7)
- 图版23 出土遺物(8)
- 图版24 出土遺物(9)
- 图版25 出土遺物(10)

I 調査に至る経過

遊佐町北西部に位置する宮田集落の北東部一帯には、庄内高瀬川や月光川の流域に沿って点在する数多くの遺跡が知られている。これら遺跡の立地基盤は河川の形成した自然堤防などの微高地で、そこでは洪水や流路変更などの原因から集落の停廢や移動、新興や再興などの営みが絶ゆまなく繰り返されたことが推測される。

遺跡は遊佐町大字宮田の東側水田中にあり、遺物の散布が広範に認められたことから平成3年度になって新規に登録された遺跡である。発見の契機は、平成2年の秋に実施された県教育委員会による遺跡詳細分布調査の実施であり、平成3年度以降に予定される県営圃場整備事業（月光川下流・高瀬川地区）及び、県営灌漑排水事業（月光川地区）の予定地域について表面踏査などを行ったことに因っている。また、本遺跡においては上記の開発事業と遺跡の現状保存との調整に資するため、平成2年10月24・25日に試掘調査を実施したところ、柱穴他の遺構や平安時代の須恵器・あかやき土器などの遺物が包蔵されることが確認された。これら遺構・遺物の広がりは東西300m、南北400m以上におよび、その大半が上記の事業計画区域内に含まれていた。そのため、県教育委員会は試掘調査の結果を基に事業主体である県農林部など関係機関との間で保存のための協議を重ね、止むを得ず削平されるなどから壊される部分については平成4年5月11日から同年7月27日の期間で緊急調査を行って記録保存を計ることとなったのである。



第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境（第1図）

庄内平野は東方を出羽丘陵に、西側を庄内砂丘に挟まれる海岸平野で、南北55km、東西は北端部で3km、南半部で約25kmに及ぶ南北に長大な三角形を呈している。また、平野のほぼ中央には山形県の母なる川「最上川」が西流して日本海へと注ぎ込み、庄内地方の北と南を分かつし、自然の境界線としての役割を果たすほか、政治・経済の分野においても歴史的に重要な役割を担ってきた。

木原遺跡はこの庄内平野北端部の飽海郡遊佐町大字宮田字木原に所在する。周辺地域の地形は、地理学的には東から出羽丘陵の一部をなす「蕨岡・山根丘陵」、「日光川・月光川複合扇状地」、「庄内北部河間低地」、「吹浦三角州」、「庄内北部砂丘」等に区分される。本遺跡の立地環境をこれらに照らせば「日光川・月光川複合扇状地」の扇端部にあたり、高瀬川と月光川に挟まれた広義の「庄内北部河間低地」（標高6～7mを前後する）上の微高地と判断される。すなわち、古代の庄内高瀬川と月光川によって形成された自然堤防に営まれた集落跡と判断され、その生産基盤は集落を取り巻く肥沃な土壤を基とした水田にあったと推測される。現在の水田を成す表層地質の土壤は粘土質シルトからなる沖積層で、遺構検出面の地山は安定したシルト質土壤である。一方、地下水位は日光川や月光川の湧水帶上にあるためか比較的高く、遺構検出面下約50～70cm前後での出水を見る。

2 歴史的環境（第1図）

遊佐町には、今まで184カ所の遺跡が確認される。時代は旧石器時代から江戸時代までの長期にわたり、庄内地方においては歴史的価値の高い遺跡や遺物の豊富な地域の一つに数えらる。これら遺跡の分布は、出羽丘陵の山麓部に縄文時代の集落や古代の窯跡、および中世の城館などがあり、平野部の川筋に奈良・平安から鎌倉・室町時代に至る古代から中世の集落遺跡が点在するなどの特徴が顕著である。

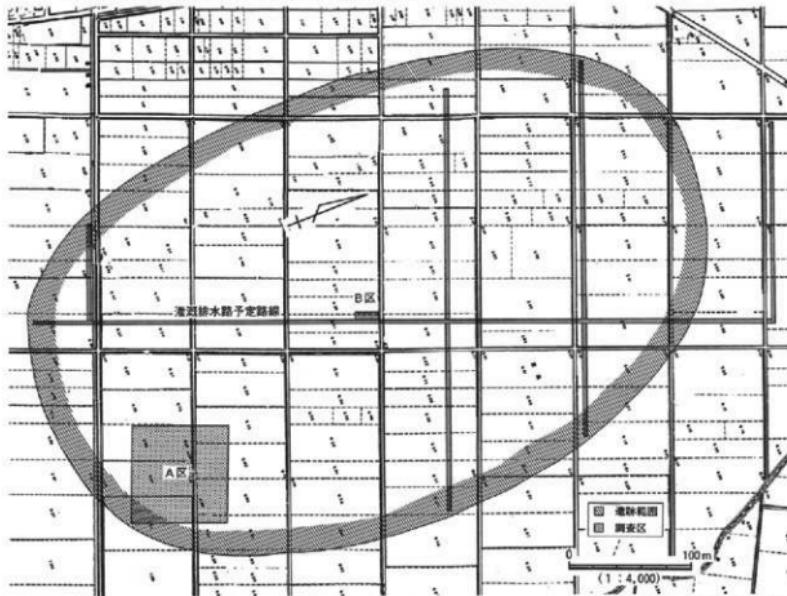
本遺跡を初めとする平安時代の集落は既に見たように沖積平野に形成された自然堤防などの微高地を主として占地している。現在までのところ、日光川と月光川に挟まれた下小松周辺の前田・地正面・佐渡・塚田遺跡をはじめとして、高瀬川左岸野沢地区の宅田遺跡、月光川左岸の小深田・下長橋・浮橋遺跡、同岩川地区の東田遺跡など多くの遺跡で発掘調査が行われてきているが、さらに、未発掘の集落遺跡も各河川沿いには多数確認される。

これらの集落は各調査の成果からみて奈良時代から平安期に入る9世紀前葉頃から急激に増加したと推測される。すなわち、出羽国衙に擬定される史跡「城輪櫛」造営などと密接に関連していたと窺われ、当時の政治的背景や徐々に高まりつつあった在地での生産力に連動した様相と推察される。この中で宅田遺跡周辺や掘立柱建物跡を板材列で囲む小深田遺跡、あるいは地鎮関連の遺構が検出された下長橋遺跡等はその他の一般的な集落とは趣を異にしており、営まれた時代が同一でないとしても、古代飽海郡（遊佐郷）域における官的機能を有した遺跡、あるいはその一角を占める遺跡と評価できそうである。

III 調査の概要

調査は、平成2年の秋に実施した分布調査の結果に基づき、遺跡域の南東半部分6,400m²を主たる調査実施区（A区）として、平成4年5月11日から開始された（第2図）。

まず最初に灌漑排水事業計画の排水路センター杭を起点とする10×10mを一単位とするグリッドを設定し、西側排水路の中軸線に沿う南北ラインをY軸、それに直行する東西ラインをX軸として調査用の座標組を行っている。すなわち、調査の主体となるA地区は北西隅の座標交点を代表させて（X-Y）=（0-A）等で表記され、調査区全体は0～8-A～Iまでの各グリッドで表示される。なお、基線のY軸方向は磁北から21°50' 東方に振れていた（N-21°50' - E）。その後、重機による粗掘で表土を除去し、人力の面整理により遺構・遺物を検出した。遺構はそのプラン確定後にマーキングを行って平面図作成などを行っている。また、これと並行して、灌漑排水路の予定路線に沿うトレーニチを入れたところ、遺構と遺物のややまとまって見つかった地域（B区）が認められたことから若干部分を拡張してその精査・記録も併せて実施した。A区も同様に遺構・遺物の精査、図面や写真等の記録作業を行い、7月23日に現地説明会を開催するなどして同月27日に現地での調査を終了した。調査の結果、A区では掘立柱建物跡4棟、井戸跡3基、竪状溝跡など総数にして1,200基を超える遺構を検出し、約100箱に及ぶ多量の遺物を得た。B地区では竪状溝跡他22基以上の遺構と、遺物約4箱の出土がある。



第2図 調査区位置図

IV 遺跡の概観

1 立地と層序

木原遺跡はJR羽越本線の遊佐駅から北西へ約1.5kmの遊佐町大字宮田字木原を中心とした水田地帯に所在している。遺跡の北東には雄大な鳥海山が迫り、その東部には本遺跡へも土器を供給したであろう古窯などの営まれた出羽丘陵のなだらかな稜線が連なっている。本遺跡の位置する一帯は遺跡の南側を西流する月光川と、北東側を西流する高瀬川に挟まれた広義の河間低地に分類されるが、その立地は月光川と高瀬川によって形成された自然堤防の南東端部、標高6.5~7mを測る自然堤防の微高地と考えられる。

なお、自然堤防（微高地）ほかの旧地形は現在みることのできる水田景観からは明確には捉えにくく、試掘調査等の結果などから往時の起伏が推測された程度である。

今回の調査区における所見では南東から北西にかけて安定した基盤層が広がり、南西や北東に向かって徐々に基盤層が下がって泥炭化する状況と看取された。すなわち遺跡の周辺には地盤不安定で低湿な後背湿地が広範に広がっていると推測される。

遺跡域での基本層序は、以下に記す4層から構成される。

I層：暗褐色粘質シルト（耕作土）、II層：褐色粘質シルト、III層：暗褐色粘質シルト（遺物包含層）、IV層：にぶい黄褐色シルト（遺構検出面）である。

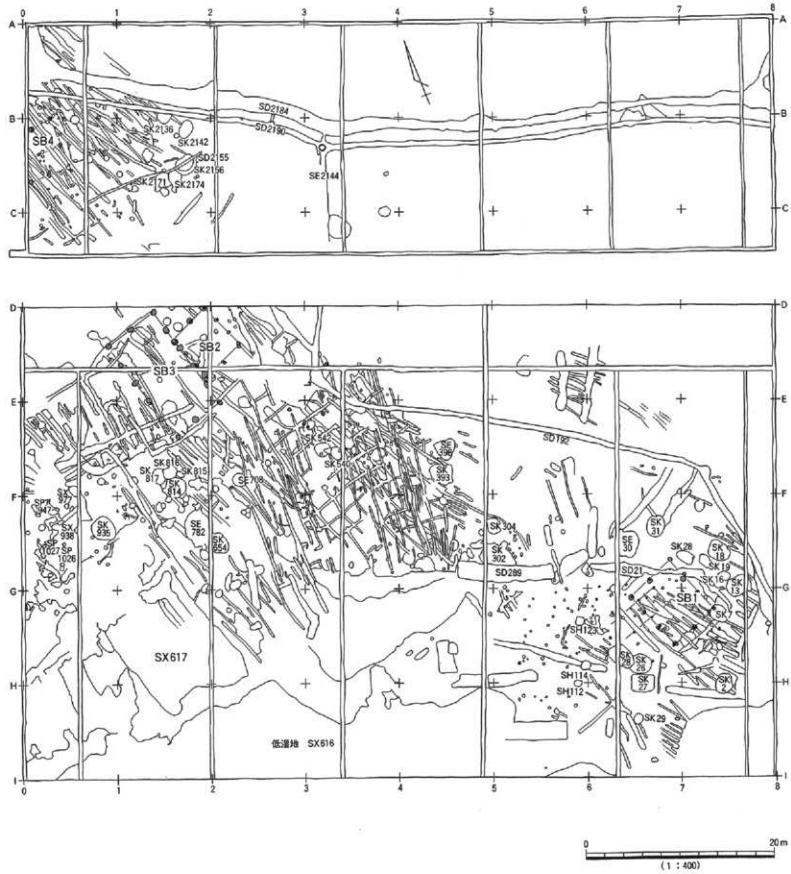
2 遺構と遺物の分布（第3図）

遺構・遺物の分布する範囲は、遺跡詳細分布調査などの結果から、東西300m、南北400m以上に及ぶと推測され、さらに北側へ延びる状況が推察された。遺跡面積にして実に120,000m²以上という広大な地域となる。しかし、遺構・遺物の集中箇所は基盤（地山）が最も高く安定する自然堤防の尾根筋と対応し、そこでは集落を形成した建物跡ほかの遺構が主体的に分布していると捉えられた。なお、検出遺構の配置状況は第3図に示した通りである。

A区では、掘立柱建物跡4棟以上、柱列、井戸跡4基、大小の土坑、墓壙及び、歛状溝跡群などが検出された。これらの分布はその配列から南東から北西方向へ向かう広がりと捉えられる。すなわち、これらの遺構は、掘立柱建物跡を中心とする複数単位の家・屋敷的な居住域の連続と考えられるものである。また、B区は灌漑排水路の計画線形に沿ったトレチから、歛跡や土坑ほかが検出されたが、それらの位置からはA区から一連で続く遺構群の広がりを示す一端と考えられた。

一方、A区南西部ほかに見られる泥炭質で低湿となる遺跡周辺部には古代の水田跡と確認できる明確な遺構の検出はなかったが、おそらく水田が拓かれていたと想像される。

また、遺物の分布は火山灰を伴う土坑内覆土などを中心として調査区全域に認められたが、特に調査区南西半部のSX938-977など不整な落ち込み遺構に見られたような10世紀前葉～中葉段階にかかる時期の多量の土器群が二次的な流れ込みや投・廃棄とも考えられる状態で出土するあり方が注目された。



第3図 造構配置図

V 検出遺構

1 堀立柱建物跡

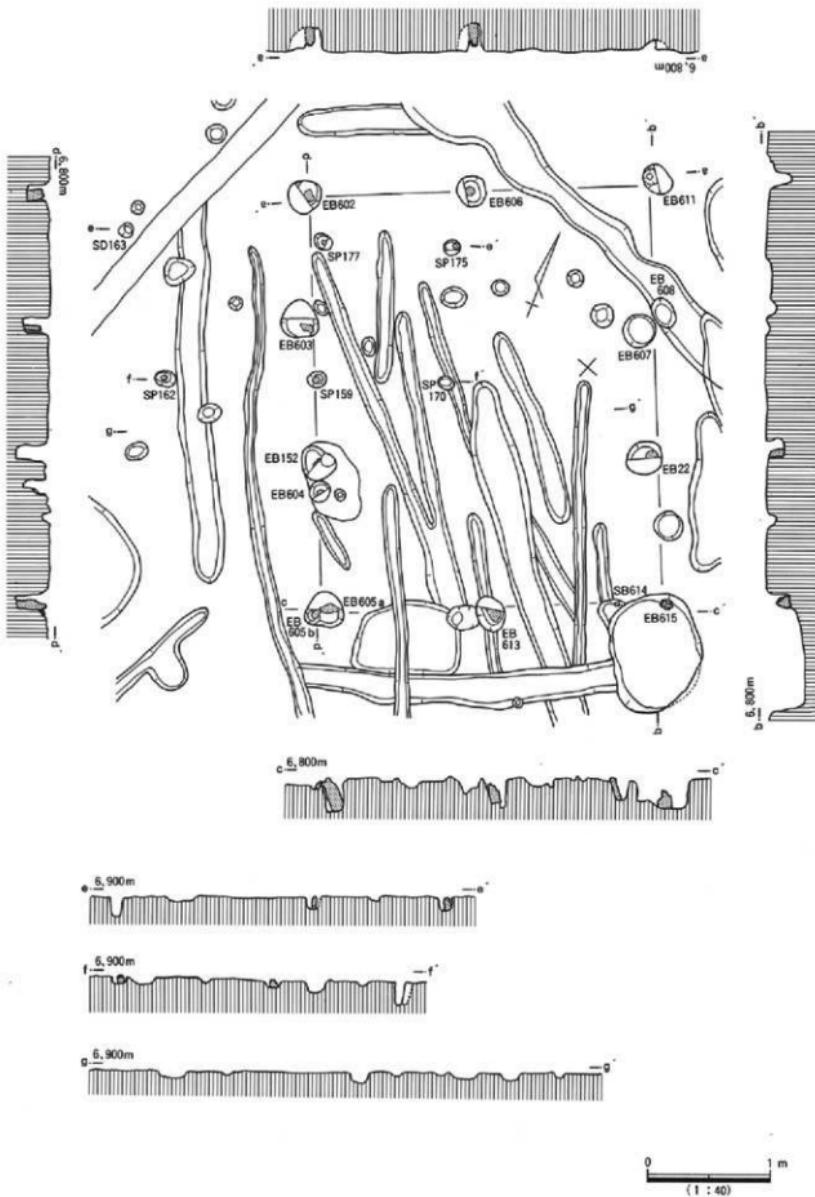
堀立柱建物跡として確認できたものは、SB 1～4 の 4 棟である。このほかにも建物跡と思われる掘り方や柱根を幾つか検出できたが、柱穴の組合せ等で無理が伴うため積極的に建物跡と認定するには至らなかった。以下に SB 1～4 について概述する。

SB 1（第4図）A区東半部、6～8-F～Hグリッド、層上面で検出された。柱穴 EB615はSK 7に切られている。梁行5.6m、桁行6.9mを測る2×3間規模の建物跡で、主軸方位はN-24°-Wである。柱間距離は東面の桁行EB611・607・22・615で2.3m・2.2m・2.4m、西面の桁行EB602・603・152・605aで2.2m・2.3m・2.4mとなる。また、北面の梁行EB602・606・611で2.7m・3.0m、同南面の梁行EB605a・613・615では2.8m等間であった。このSB 1では柱根の遺存が全体に良好で、EB22、602、603、605a、606、613、615の各々に認められた。掘り方は円形や梢円形を呈し、径50～60cm、検出面からの深さは15～55cmである。なお、EB607・615・605a・152には支柱穴と推定されるEB608・EB614・605b・604が付随していた。遺物は上記の柱根類のみで柱穴から土器等は出土していない。

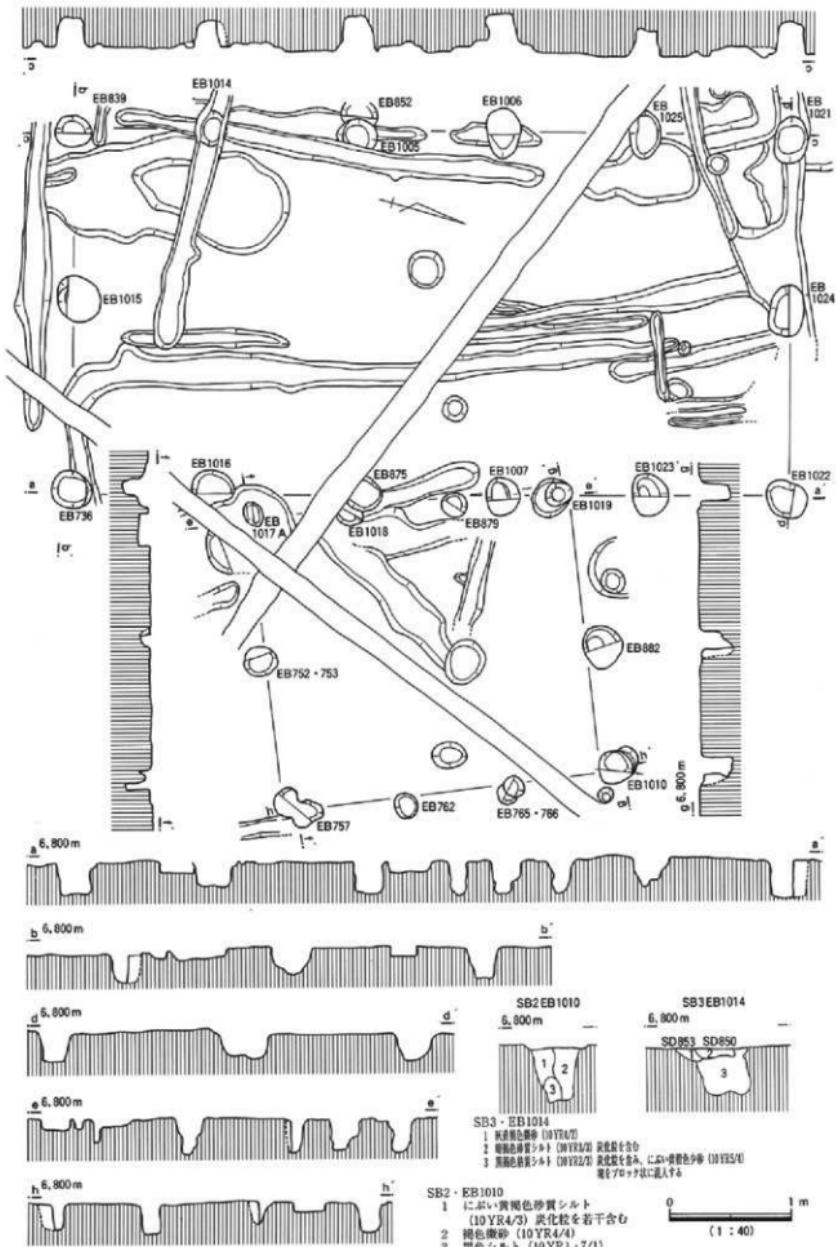
SB 2（第5図）A区西半部、1～2-D～Eグリッド、層上面で検出された。梁行4.8m、桁行5.2mを測る2×3間規模の建物跡である。西面するEB1018がSB 3のEB875に切られる新旧関係がある。主軸方位はN-19°-Wである。柱間は北面の梁行EB1019・882・1010間で2.6・2.2m、南面の梁行EB1017A・753・757で2.4mの8尺等間となる。また、東面する桁行EB1010・765・762・757は1.8・1.8・1.6mで、西面桁行EB1019・879・1018・1017Aでは東面の桁行と等間であった。掘り方はほぼ円形で、確認面からの深さ16～64cmとばらつきがある。EB757には柱根が残存していた。

SB 3（第5図）A区西半部、1～2-D～Eグリッド、層上面で検出された。梁行6.0m、桁行12.0mの2×5間規模の建物跡である。東面の桁行がSB 2を切る。主軸はN-14°60' -Wである。柱間は北面の梁行EB1021・1024・1022で2.6・3.4mを測り、南面梁行EB839・1015・736では2.8・3.2mを各々測る。東面と西面桁行の柱間はEB1016・875・1007間で2.6-2.2mとなる他はすべて2.4mの8尺等間である。掘り方プランは梢円形のものが多く、径は58～78cmを測る。確認面からの深さは40～64cmでしっかりとした造りが多い。EB1005には支柱と推測されるEB582が重複していた。

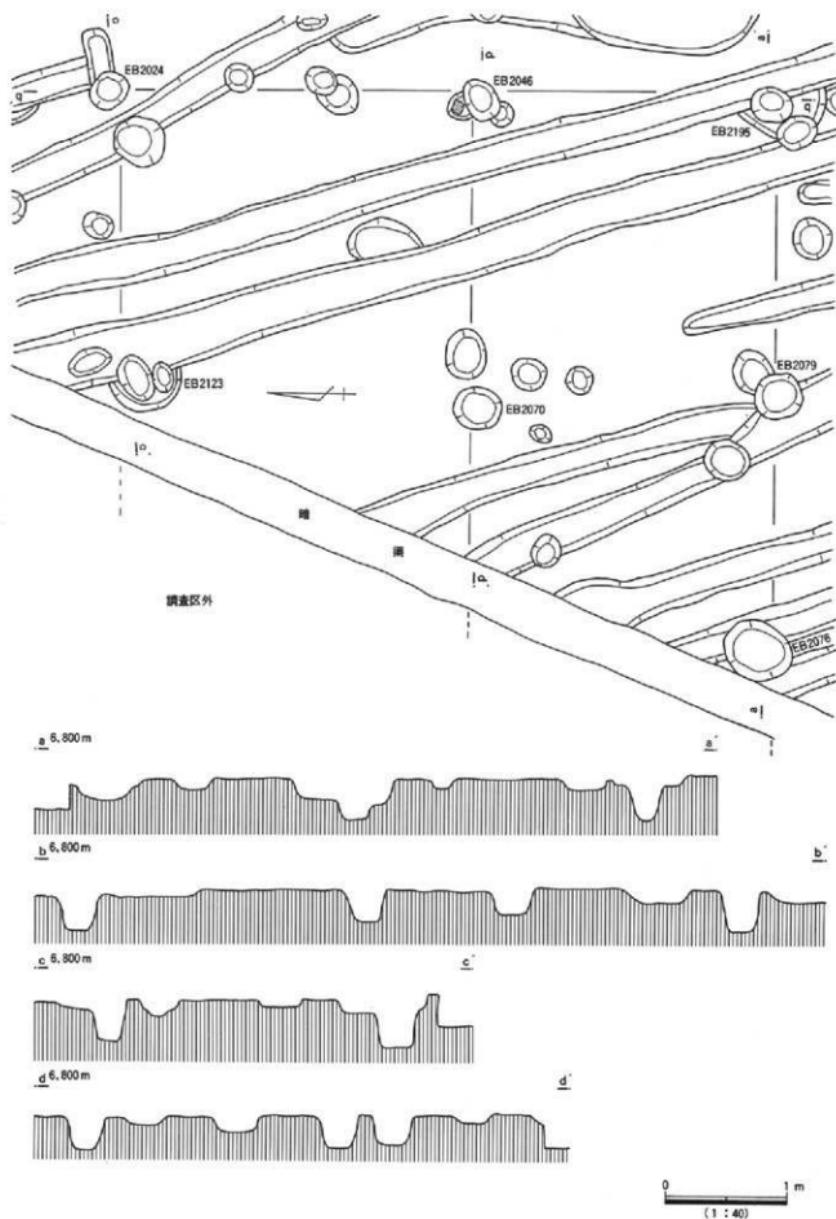
SB 4（第6図）B区西半部、0～1-Bグリッド、層上面で検出され、西側は調査区外にかかるため未検出となる。梁行5.3m、桁行4.4m以上の規模があり、西方に延びる2×2間以上の総柱建物跡と考えられる。主軸はN-95°20' -Wである。柱間は東面の梁行EB2024・2046・2195で2.9・2.4m、南面の桁行EB2195・2079・2076間で2.4・2.0m、北面桁行EB2024・2123では2.4mの8尺等間である。また、棟柱のEB2046・2070では2.5mであった。掘り方はほぼ円形で、径は25～60cmを測り確認面からの深さは17～37cmである。南西方向に延びる鉄状溝跡群を切る新旧関係が知られるほか、EB2079、2046には支柱



第4図 SB1建物跡、SA1・2柱列跡



第5図 S B 2・3 建物跡



第6図 SB 4 遺物跡

穴と推測されるSP2078や小ピットが付属していた。

2 井戸跡

井戸跡は井戸枠・曲物などの施設を伴うものと素掘りのものを合わせて計4基が検出された。以下に各井戸毎に形態・規模・構造・出土遺物などの概略を記す。

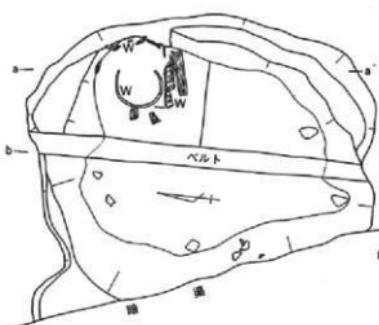
SE30（第7図）A区東半部の6-Fグリッドで検出され、SB1の北方に隣接してSK31に近接する。西側を暗渠により壌されているが曲物の周りを矢板で囲う主体部は良好に遺存していた。掘り方の平面プランは楕円形で、長径2.74m、短径2.15m以上の規模が認められる。井戸底面までの深さは確認面から72cmである。井戸枠は掘り方の北東隅に設置され、曲げ物を中心としてその四方に矢板を一辺50~60cm規模で配置する状況が窺えた。矢板は長さ32cm前後で残るが、南辺を除いては遺存が悪い。曲物は直径36cm、高さ34cmである（第25図下段）。覆土は井戸枠内が3層で川砂などの自然堆積層が主体となる。掘り方の埋土は8層からなり全体に火山灰の小ブロックを含む特徴が認められた。出土遺物は僅少で、図化できたのは掘り方から出土した須恵器の蓋（第17図19）程度で留まっている。

SE782（第7図）A区西半部、1-FグリッドにSB3、SE708、SK935に南接して検出された井戸跡で、井戸枠は矢板と横桟によって構成される。東側を暗渠に切られ、北西方向に延びる畝状溝跡群を切るなどの新旧関係が認められる。掘り方は長径3.5m、短径2.5mの楕円形で遺構検出面からの深さは約1.1mである。井戸枠は矢板が一辺約70cmの四方に打ち込まれ、井戸枠内の中央に設置されるほど組みの横桟によって支えられる構造である。西および南隅矢板の外側には土砂の侵入などを防ぐ補強板材としての添え木も認められた。覆土は最下層に砂質シルト、中位に泥炭質の粘質シルトが堆積し、ゆっくりとした自然埋没の状況と窺えた。井戸底面からは長径30cm以上の大きな2個の河原石が出土している。なお、井戸枠北東面の矢板は土圧から大きく内側に傾斜していた。出土遺物は井戸の内部・掘り方共に僅少で、図示できたものでは墨書のあるあかやき土器壊の体部破片（第20図4）1点のみである。

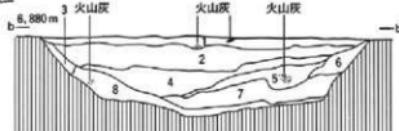
SE396（第8図）A区中央部、5-Eグリッドで検出された素掘りの井戸跡である。掘り方は一辺2.3m前後の隅丸三角形で遺構検出面からの深さは約90cmを測る。上部は緩やかに掘り込まれるが、中位で急傾して平坦な底面に至る。覆土は11層からなり、自然堆積による埋積と考えられる。出土遺物は土器小破片類若干であった。

SE708（第8図）A区中央部西、3-Eグリッドで検出され北西に延びる溝跡群を切る素掘りの井戸跡である。平面形は長径1.48m、短径1.3mのほぼ円形を呈し、深さは遺構検出面より80cmである。掘り方は上部が若干緩やかながらすぐに垂直に掘り込んで平坦な底面を形成していた。覆土は8層で東側からより多く埋積された自然堆積の状況と認められる。出土遺物は少なく、図化できたものはない。

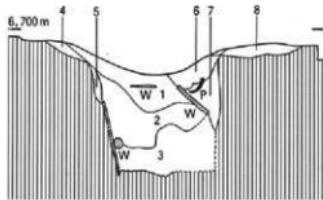
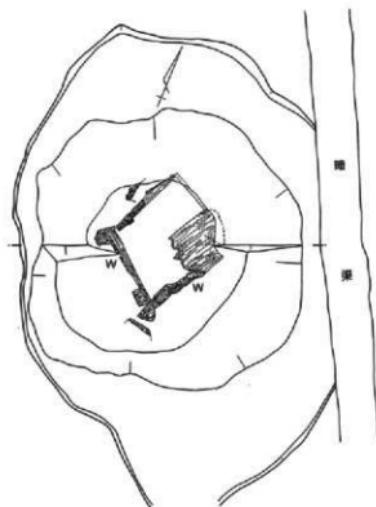
SE30



- SE30
 1 にぶい黄褐色粘質シルト (10 YR5/3)
 2 黄褐色中砂 (2.5 Y5/3) (川砂礫)
 3 灰黄褐色粘質シルト (10 YR5/2)
 4 灰黄褐色中砂 (10 YR5/2)



- SE30
 1 にぶい黄褐色粘質シルト (10 YR6/4) 大山灰ブロック少量含む
 2 にぶい黄褐色粘質シルト (10 YR5/4) 大山灰ブロック少量含む
 3 黄褐色粘質シルト (10 YR5/6)
 4 にぶい黄褐色粘質シルト (10 YR4/3) 硫化物を多く含み、土器片を含む
 5 明黄褐色粘質シルト (10 YR6/8) 大山灰ブロックを含む
 6 にぶい黄褐色粘質シルト (10 YR5/3)
 7 灰黄褐色粘質シルト (10 YR5/2)
 8 灰黄褐色粘質シルト (10 YR4/2) 大山灰小ブロック少量混入



- SE782
 1 黒褐色シルト (2.5 Y3/1)
 2 黒褐色粘質シルト (10 YR2/1)
 3 オリーブ黒色粘質シルト (5 YR2/2)
 4 黒褐色粘質シルト (10 YR3/2)
 5 黑褐色粘質シルト (2.5 Y3/1)
 6 黑色ルート (2.5 Y2/1)
 7 黑褐色シルト (10 YR3/1)

0 1m
(1:40)

第7図 S E 30、782井戸跡

3 土 坑 (第8・9図)

土坑は大小を含めて190基が確認された。分布は調査区全体に及ぶが主に建物跡などの住居周間に偏在し、多くが地点毎に集中して重複していた。これらは規模・形態により4類に大別され、さらに遺物の在り方等から細別される。以下に主な土坑について概述する。

SK302 A区、4～5-Gグリッドで検出された。SK304に北接し、SD289に南辺を切られ、暗渠によって西辺が切られている。平面形は隅丸方形で長径は3.9m、短径は2.9m以上と推計される。掘り方は緩やかで若干の段を築きながら底面に至る。確認面から76cmの深さがあり、底面はU字状を呈す。覆土は7層からなり、中位の4層には火山灰が厚さ2～4cmで堆積する。また、長径30cm前後の偏平な河原石が4・5個廻棄されており、土器等を押し潰していた。遺物は4層の火山灰層を挟んで、第18図1～24に示すあかやき土器坏を主体とする9世紀末～10世紀初めの土器群が纏まっていた。

SK7 A区、7-Hグリッドで検出され、長径2.03m、短径1.5mの梢円形プランを持つ。SK13、18に近接し、北側でSB1のEB615を切り、北西方向に延びる溝跡群をも切る。掘り方は検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。確認面からの深さ68cmを測り、覆土は9層から成る。中位から下位にかけて10世紀前半代の土器片や加工痕のある木製品が認められた(第17図3～10)。

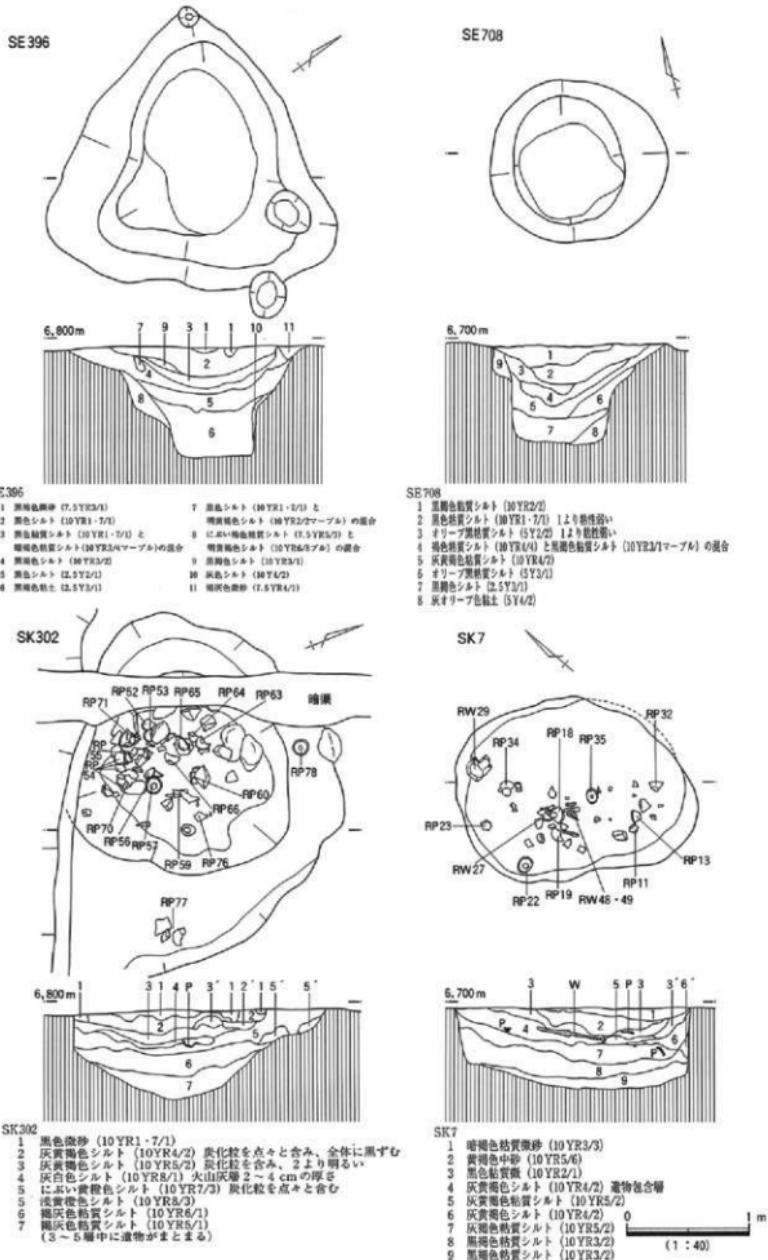
SK304 A区、4～5-Gグリッドで検出された。長径1.93m、短径1.28mの隅丸方形プランを持つ。掘り方は上面が緩やかで中位より急傾して底面に至る。確認面からの深さは68cmである。覆土は5層から成り自然堆積と考えられる。遺物はハラ切りを主体とする須恵器の坏、高台付坏などに纏まっている(第18図27～35)。

SK935 A区、0-Gグリッドで検出され、SB3に近接する。長径2.66m、短径2.45mの円形プランとなる。掘り込みは急斜で確認面から20cm前後で底面に至る。底面はほぼ平坦で、中央より西側に、南北に走る幅35～58cm、深さ8cm程の緩やかなU字状の溝が掘り込まれていた。遺物には須恵器の壺や両黒の坏がある(第20図22～24・27)。

SK540 A区、3-Fグリッドに検出された。SK542に西接し、南北に延びる溝跡群を切る。長径1.44m、短径1.1mを測り、略円形のプランを持つ。掘り方は急斜で底面は平坦である。確認面からの深さは22cmと浅い。出土遺物ではあかやき土器の坏・壺、回転糸切りの須恵器坏などがある(第19図4・6・9)。

SK114 A区、5-Hグリッドで検出された。SD231を切る新旧があり、SB1に西接している。同様の土坑SK112・123に挟まれており、この3基はほぼ北東方向に一線で並んでいた。規模は長径1.18m、短径0.96mで、略円形のプランを呈す。掘り方はほぼ垂直で、確認面から66cm程で一旦平坦な底面となるが、北端にピット状の深部を持つ。

壁面には茅などの編物を貼り廻らせたような形跡が窺えた。覆土は3層と識別したが、基本的には炭化物を多く含む暗褐色粘質シルトの單一層で一気に人为的に埋戻された状況と観察される。遺物では箸がまとめて出土している。SK112、同123もピット状の掘り込みや茅状編物の有無などに差はあるが同様の性格を持つ土坑と考えられる。



第8図 S E 396・708井戸跡、S K 302・7土坑

4 落ち込み遺構（第3図）

平面形が不整で確認面からの深さが比較的浅いものを落込み（SX）と判断して登録している。これらは調査区の南半～南西半部にかけての5カ所に認められ、多くの場合多量の遺物を伴っていた。成因的には微高地が部分的に浸食されてできた凹部や傾斜の変換線域の低地と考えられる。すなわち多量の遺物が流れ込んで堆積したり、あるいは人為的な廢棄によって形成された多量の土器等集積場所などとして確認された遺構である。本遺跡ではSX938・977等が該当し、位置的には建物跡周辺の低地にあたると判断される。

SX938・977 A区、0-F-Gグリッドにかけて検出した。プラン不定で黒色の泥炭質土中には多量の土器が2カ所で集中していた。当初別個の遺構として区分・登録したが、掘り進むに従って同一落込み内での二つの遺物ブロックとして認識できたものである。長径5.6m以上、短径1.4m以上の南北に延びる溝状の落ち込みである。覆土は黒色の泥炭質の粘質土でまばらに火山灰の塊を含んでいた。出土遺物は須恵器、あかやき土器、黒色土器の坏類を中心として復元、実測し得たものだけでも55点を数える（第20～22図）。確認面から底面までの深さは数cm～20cmほどと浅く、SP947に隣接するSP1026、1027の柱穴が泥炭質覆土の基底から検出される。すなわち、このSX形成以前にも調査区外の北西に延びる掘立柱建物跡が存在したと考えられる。

5 敗状溝跡（第10～16図）

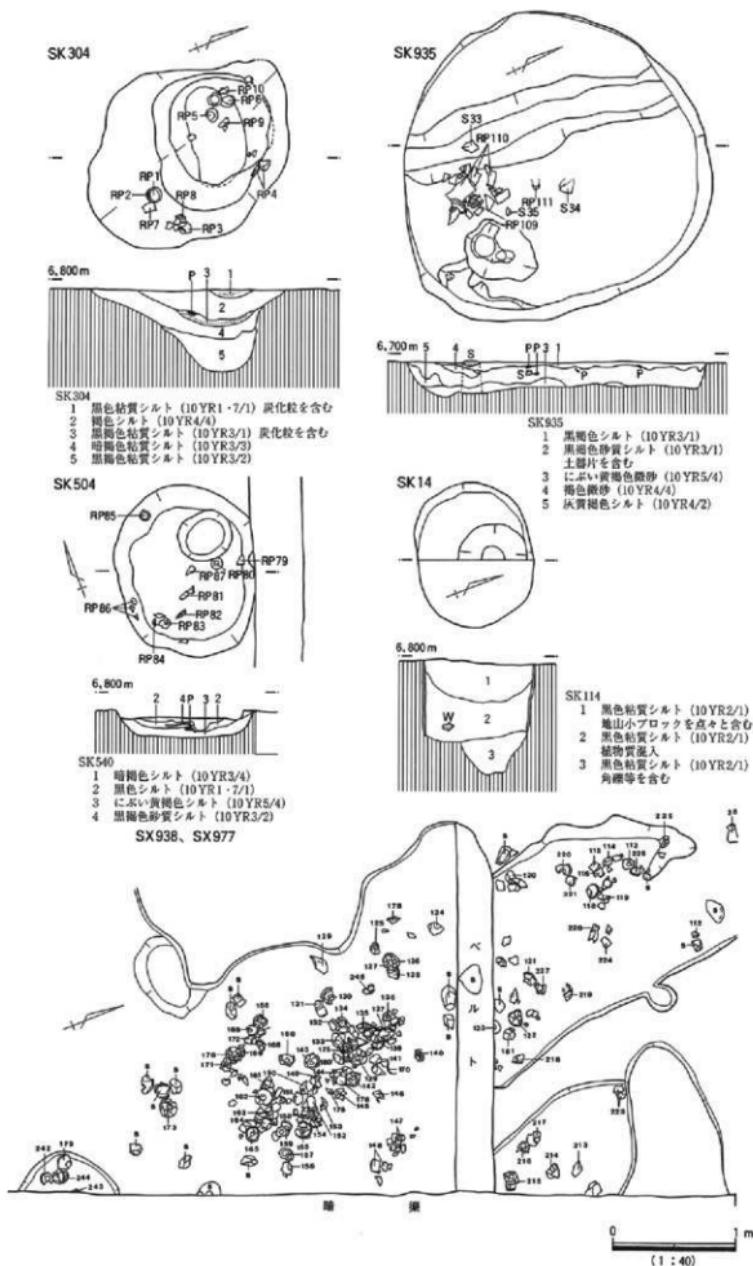
本遺跡の最も特徴的な遺構として、規模や方位、等間隔的なまとまりを見せる敗状溝跡群が上げられる。これらは調査区の6～7-G～H（1群）、2～4-E～Fの（2群）、0～1-E～F（3群）、0～1-A～B（4群）の大別4ブロックと区分されるほか、B区においても検出された。これらは切り合いや主軸方位等により時期差が窺え、數時期に渡る重複の存在が推定される。

溝跡群は概ね幅が20～40cmで、確認面からの深さは10cm前後を測り、緩やかな掘り込みでU字状や平坦な底面を形成している。規模は検出長4～6m前後で平行に走行するものが大半ながら、一単位が10mを越す一群も少なくない。なお、後者の場合は間隔幅の広くなる傾向が窺えた。また、条の単位では4・5条でまとまるものも見られるが、10本前後で一単位を形成するもの多そうである。間隔幅が30～50cmと狭いものと、1.5m前後を測る幅広のものとに分類される。狭い前者が一般的と言えるが、調査区中央部の2群では幅広の後者が主体であった。これらの主軸方位は建物主軸方位との共通性がみられ、具体的にはSB1の主軸と同方向、SB2主軸と同方向か或いは直交方向、SB3の主軸と同方向或いは直交方向、SB4主軸と同方向或いは直交方向の4つが窺える。

なお、同方向に走行する溝跡群にも重複が認められることから更に細分できそうである。

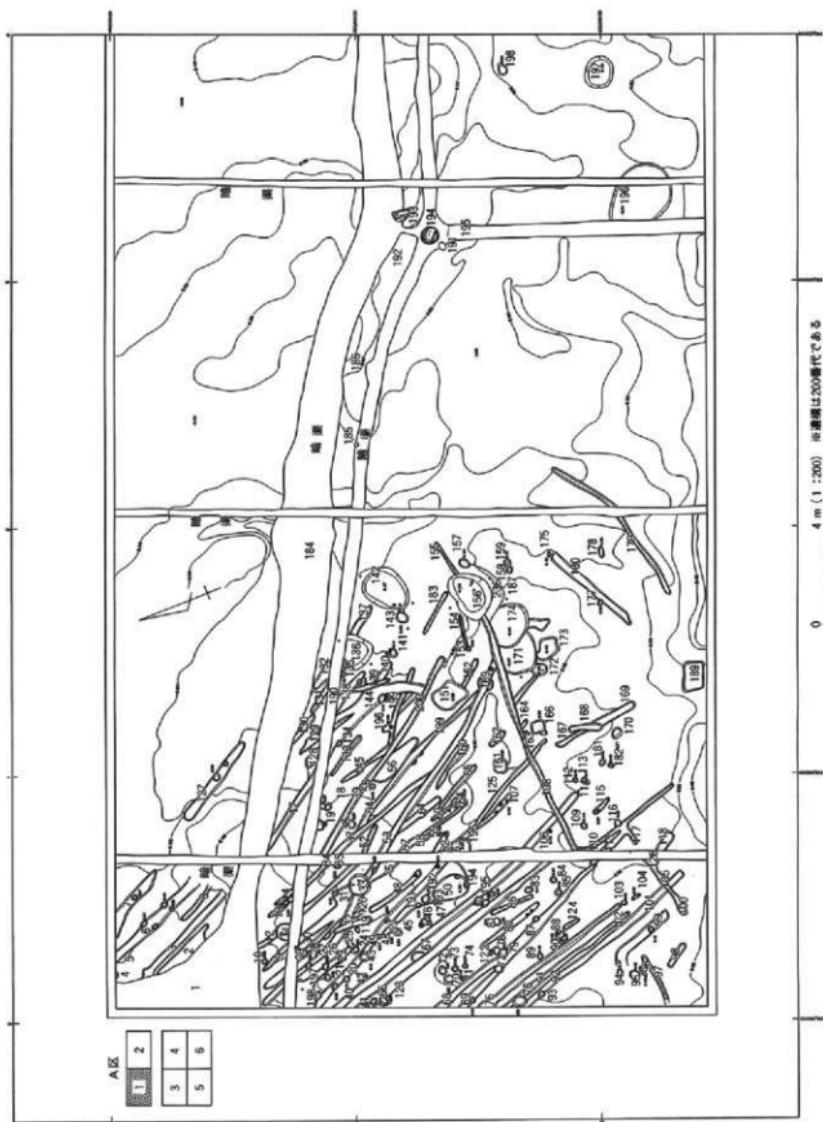
6 B区の遺構

敗状溝跡群を中心に数基の土壙と溝跡が発見された。敗状溝跡群は幅が13～68cmで長さ6m前後を測る。確認面からの深さは7～13cmで11条のまとまりが確認され、主軸はN-26°40' - Wであった。なお、図化し得た遺物は若干ながら第24図に示しておいた。

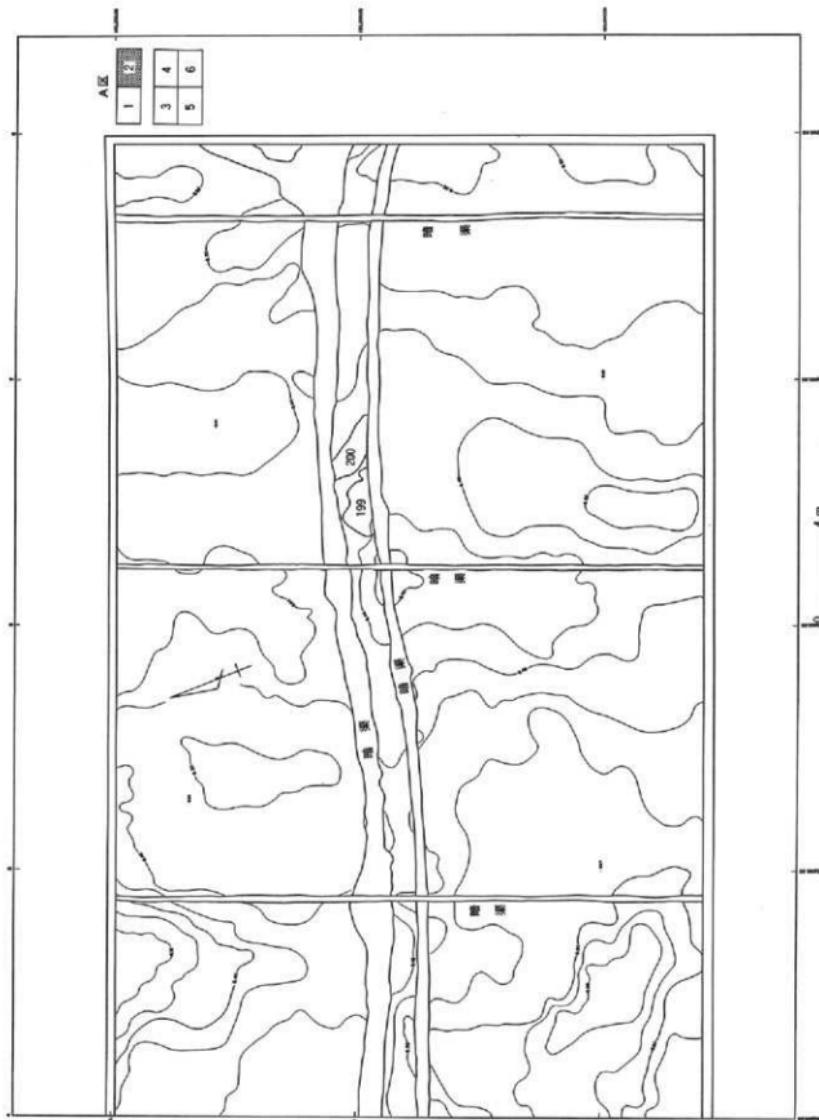


第9図 SK 304・395・504・114土坑、SX 938・977落ち込み

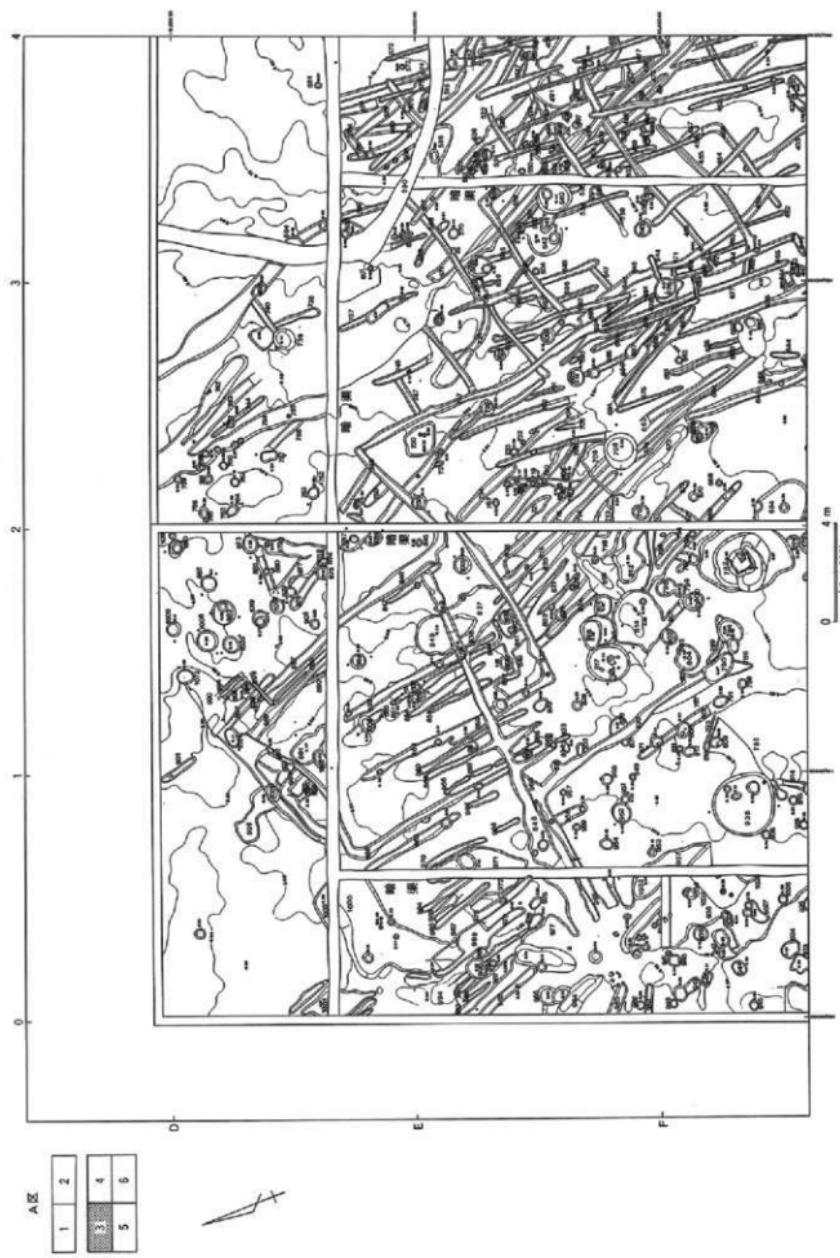
第10図 連構平面図(1)

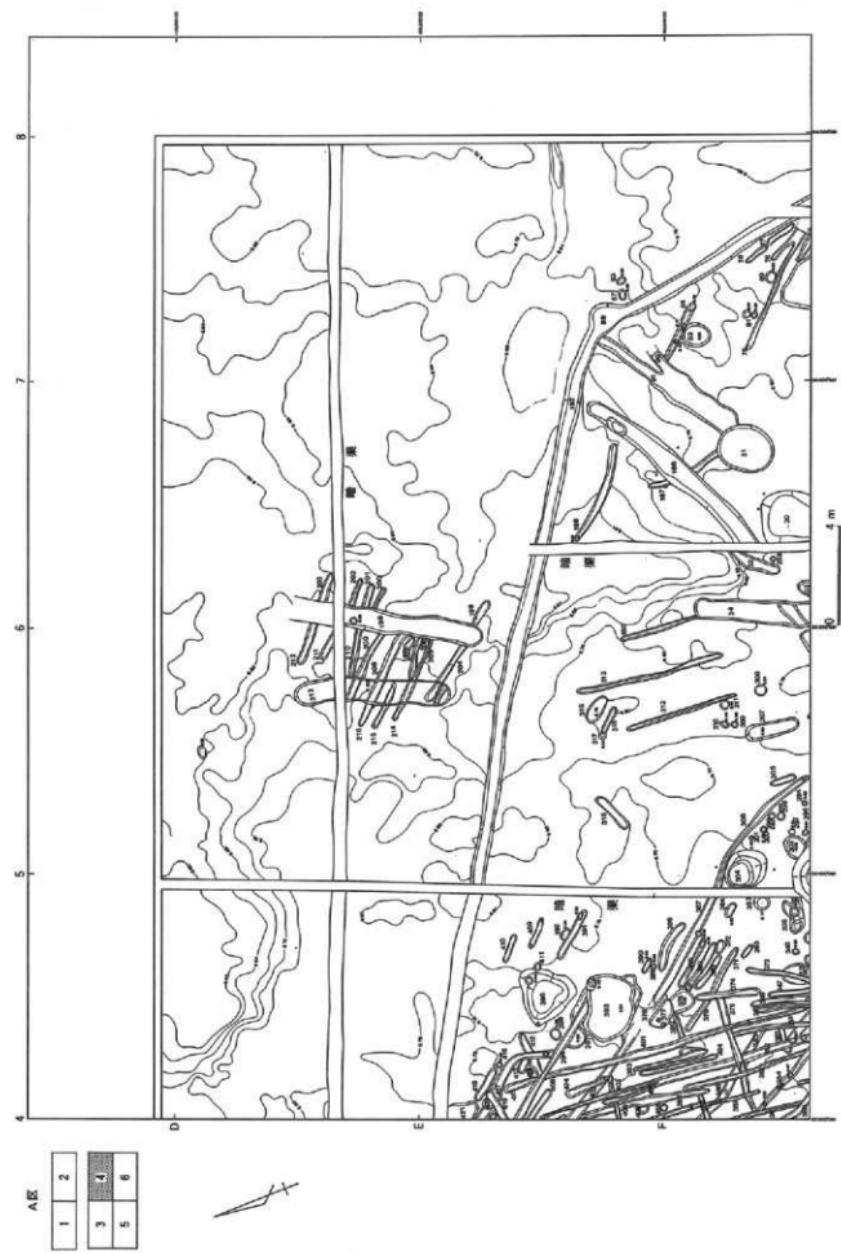


第11図 遺構平面図(2)

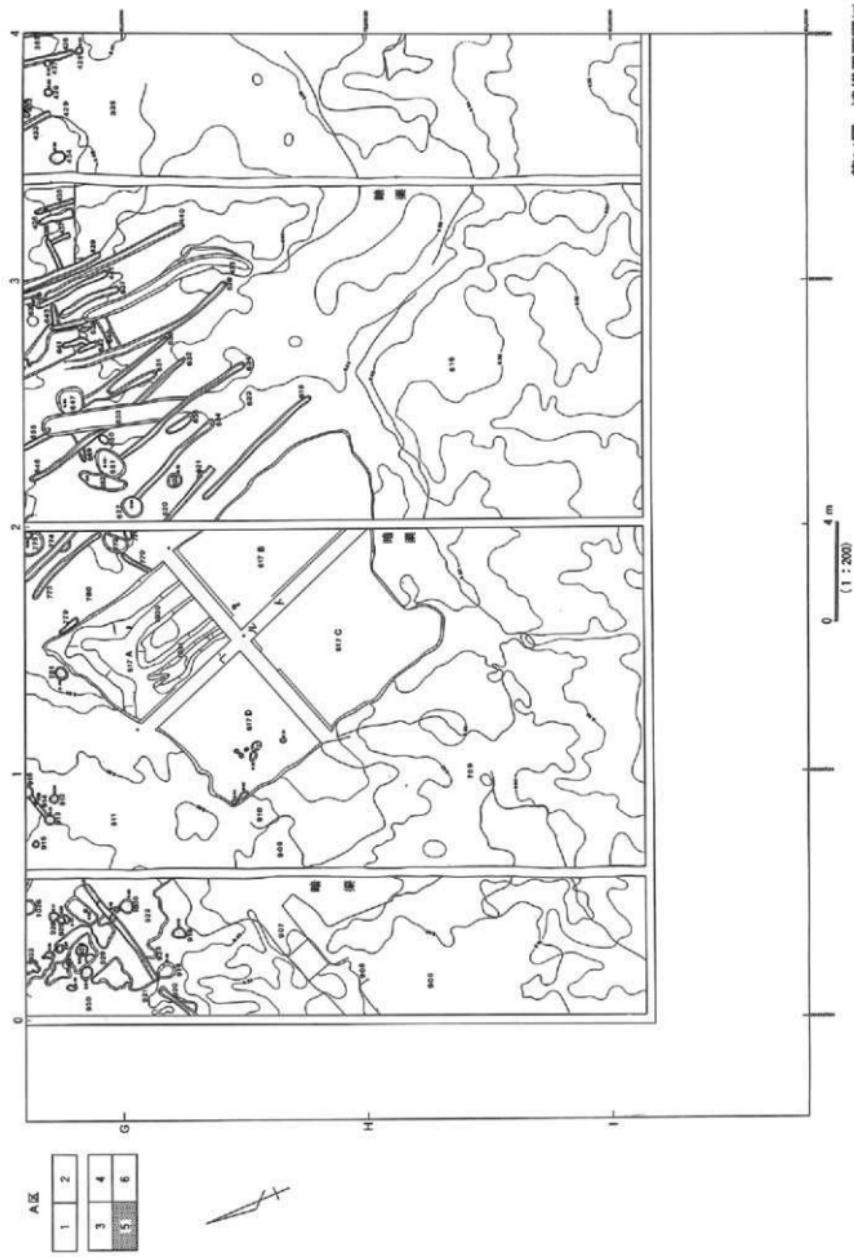


第12図 遺構平面図(3)

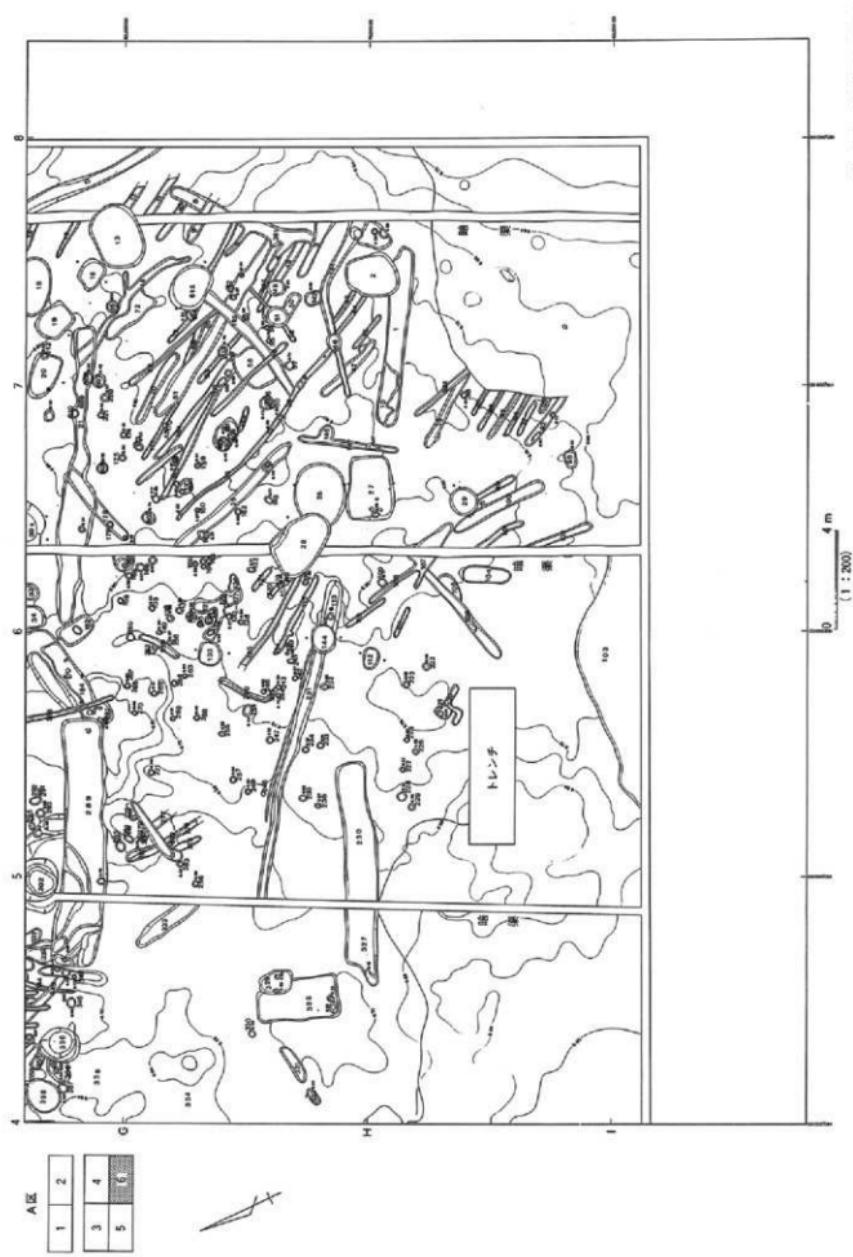




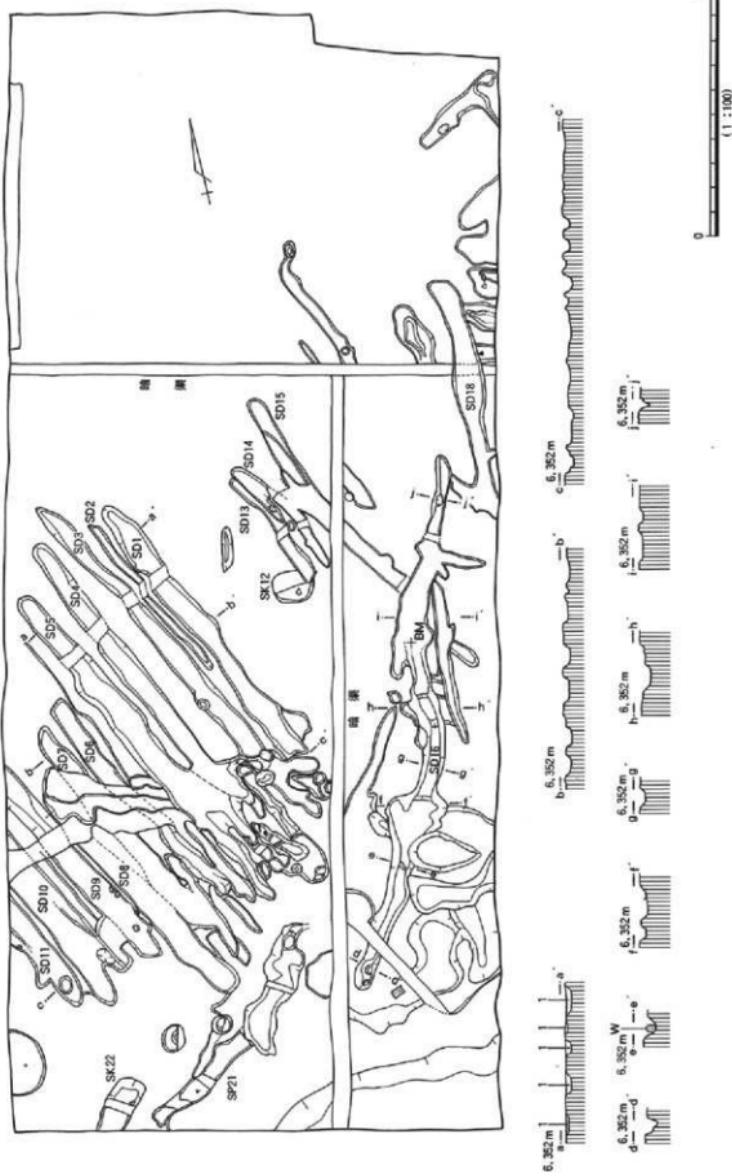
第14図 通構平面図(5)



第15図 造構平面図(6)



第16图 B地区遗構平面图



VI 出土遺物

1 土器

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして約100箱ほどである。種別的には土器・土製品・木製品・石製品があり、この中では土器類が圧倒的多数を占めた。以下に遺構単位での共伴関係を捉え、加えてこれらと年代推定の根拠となる広域火山灰（十和田aテフラ）などとの関連について概述する。

SK304土坑の組成（第18図27～34） 本遺跡では最も古いと考えられる土器群で、須恵器のまとまった資料が得られた。図化できたのは供膳形態を中心とする9点である。壺は箱型の逆台形を呈し、器高に対する口径の割合（器高/口径×100：高径指数）が27・28の値をとるA 1 a類（18-33）、および器形はA 1 a類にはば同形ながら指数24・25を示す底径がやや縮小気味で相対的に外傾度の大きいA 1 b類（18-28）の二種がある。高台付壺は深身で底部外周より内側に高台が付き、体部の立ち上がりは直線的で急傾なA 2 a類（18-31）である。

SK540土坑の組成（第19図4・5・9） 図化できた資料は3点である。須恵器壺はヘラ切りで底径が上記のものよりさらに小形化するA 1 c類（19-5）で、引き出しの強さと外傾度の増大に特徴を見る。あかやき土器壺は内湾気味の立ち上がりを示し、高径指数が40前後を測るやや大型のB 1 a類（19-9）である。また、あかやき土器壺は内傾する口縁端部が短く捕まれて外反し、丸みのある口唇部が特徴となる。

本遺跡出土の須恵器はA 1 b・c類が主体を占めるが、SK393（19-1）出土の須恵器壺に代表される「ヘラ切りで底径が小さく、口縁が内湾して立ち上がる」A 1 d類は、底径の小さな糸切り手法壺との外観的判別が付けにくく、ヘラ切りから糸切りへの技法的変換期の様相を示していると思われる。

SK302土坑の組成（第18図1～26） 本遺跡では最もまとまりのある一括資料である。覆土下位の火山灰純層を挟んでその上下から多量のあかやき土器が出土した。図化できた資料はあかやき土器の壺類を中心に24点がある。これらは器形や法量などから以下に述べるB 1 a～B 1 dまでの4類に細別される。

B 1 a類：口径指数40前後を示す器高の高い一群（18-17）、B 1 b類：指数35前後で器高がやや低く、相対的に外傾度も大きいもの（18-14）。以上の二類は法量的に大型の類型と識別される。これらの立ち上がりは内湾ないし直線的外傾で、内湾例は口縁端部の外反度がいくらか強い。また以下の中・小形の類型は器高が低下し外傾度・底径ともに増大する傾向の強いものである。B 1 c類：指数が32、33前後を示す一群（18-16）、B 1 d類：器高が壺類では最も低くなり、指数も30代を切る歪みの著しい浅身の一群（18-8）などである。なお、これらあかやき土器壺類の平均的指数値は35前後で上の類別ではB 1 b類の範囲と重なっている。煮沸形態では壺・鉢・鍋などの器種が認められ、壺・鉢類の口縁部は全体に丸みを帯びて口唇部が僅かに上方へ短く立ち上がる特徴が顕著であった。鍋は

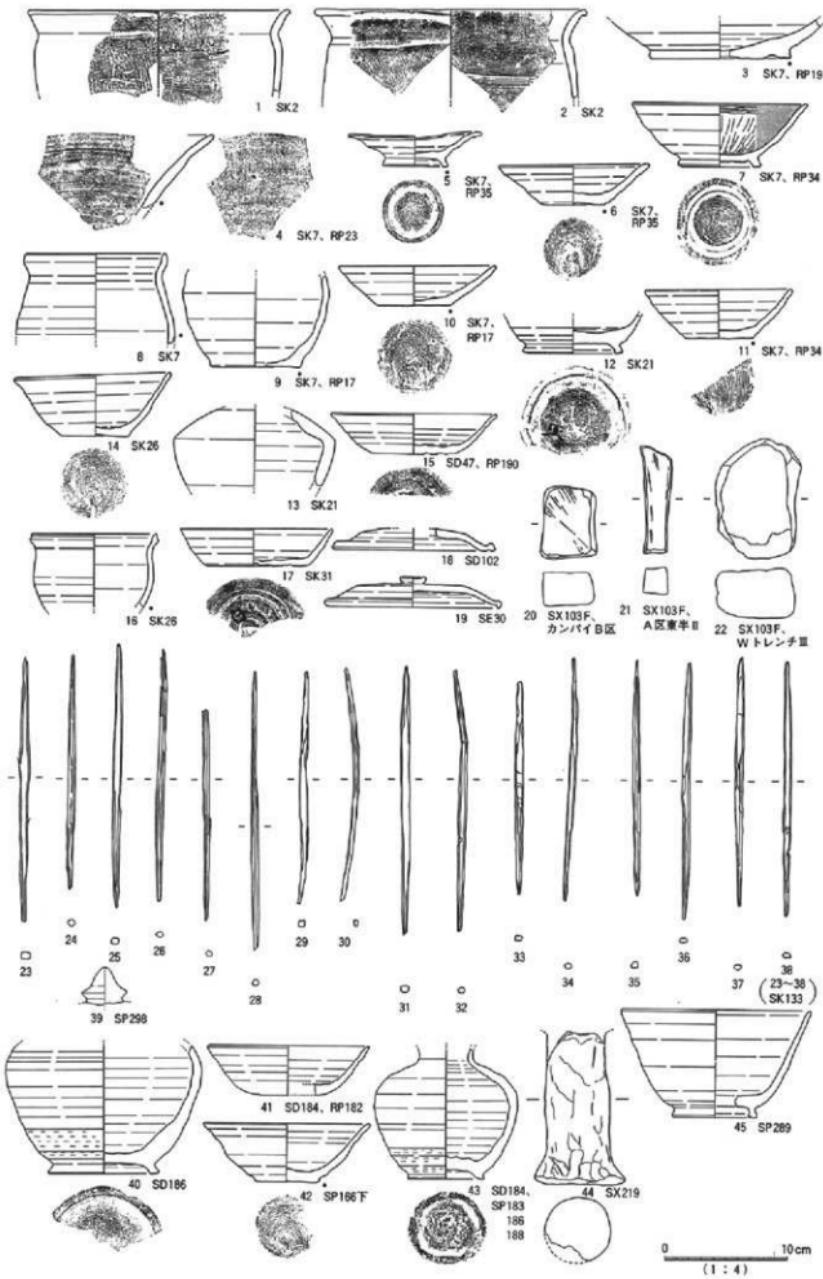
頸部での括れなど屈曲がほとんど見られず、体部から一連で続く形態が特徴となっている(18-5・13)。口唇部も甕類と同様の様相を呈する。その他では須恵器の壺1点と甕2点がある。須恵器壺はヘラ切りで底径の小さなA1d類、甕は体部上半部の破片資料で、丸みの強い肩から体部に平行タタキと同心円紋状のアテが見られた。なお、製塙土器の破片1点も出土している。層位から火山灰降下期の10世紀前葉の段階で一括的に廃棄されたものと考えられるが、時期的には主体的なあかやき土器類よりは先行のものと考えられる。

SX938・977落ち込み遺構の土器組成(第20図28~第22図33)調査区西辺部に土器の密集する不整形の落ち込み遺構がある。当初は隣接する別個の遺構として各々を捉えていたが、後に火山灰の塊を甕状に混入する覆土等の共通性から同一の遺構と判断されたものである。土器の主体はあかやき土器で、壺では200個体以上が確認された。その他、須恵器・土師器の壺類も若干認めたが、双方でも一割に満たない分量である。供膳形態としては黒色土器の量的優位が特徴的にみられた。図化できた資料は78点である。

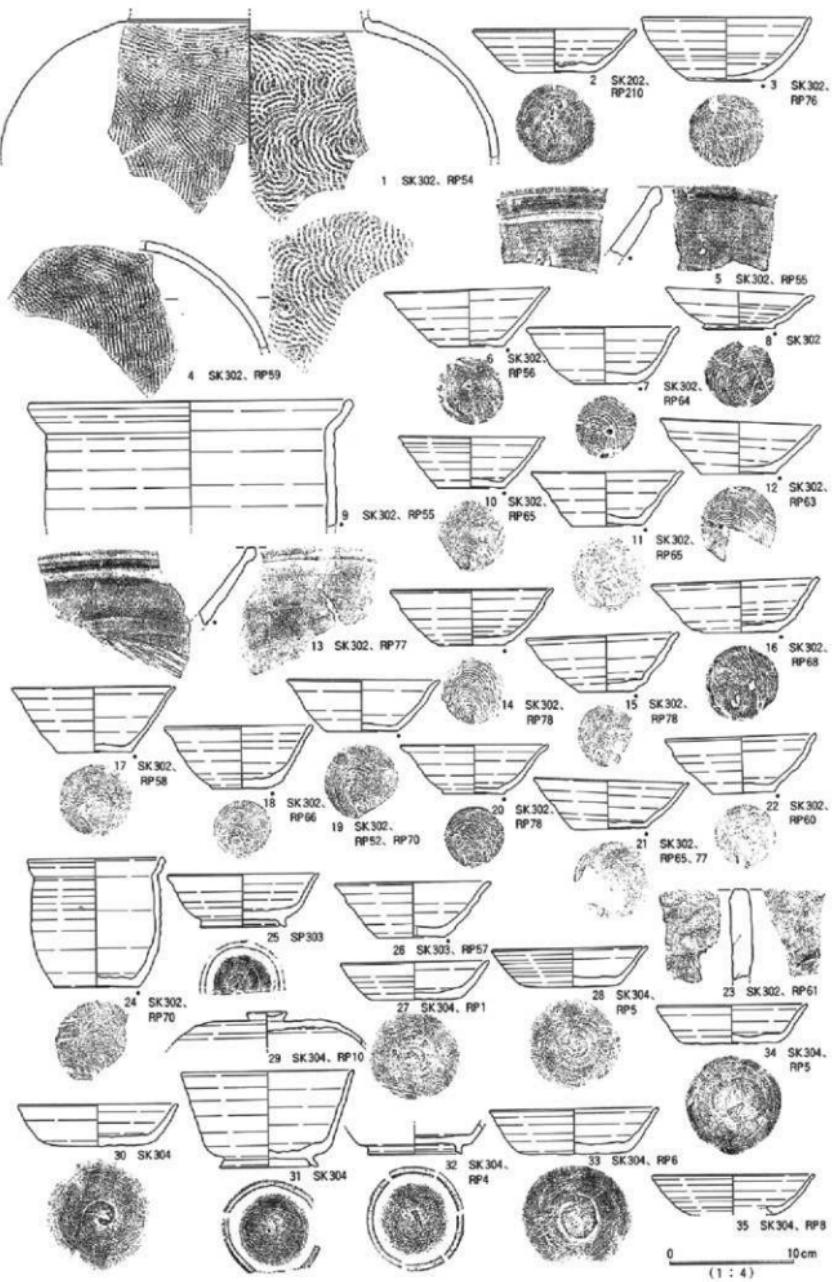
あかやき土器の壺類は54点あり身の深いB1a類から器高の低いB1d類まで形態的には豊富である。これらの平均的高径指数は34で、数値的にはSK302でのそれと同等となる。しかし、浅身のB1d類が主体となることや新しい類型の身が浅く口縁の大きく開く皿状形態を示すB1e類(21-4)、および高台付の皿類(21-12)などが加わる等の組成面からはより後出の様相と判断される。

土師器には台付の黒色土器碗があり16点が図化できた。出土数からは供膳器組成の一定部分を担うと推測される。大形で内黒の口径18cm以上のC1a類(22-32)と高径指数が40前後で中形のC1b類(22-26)の二つが識別される。また、両黒土器では概して小形で口径・器高ともに小振りな指数35前後のC2b類(21-38)のみが認められた。いずれも底部の切り離しは糸切りである。なお、21-36は菊花状のヘラオサエが廻らされる例である。須恵器は3点で高台付壺と甕を認めたが、供膳形態はほぼ払拭されるようである。高台付壺(22-11)はヘラ切りでA1b類の壺身に高台が付き、体部下半に回転ヘラ削り調整の施されるものである。煮沸形態ではあかやき土器甕および鉢があり、口縁部は前述のSK302例と同様な特徴を示すが口唇部の肥厚はほぼ消滅している。時期的にはSK302との近接が考えられるが、あかやき土器での新しい類型や覆土に火山灰を塊で混入するなどの状況から幾分後出の組成と判断される。

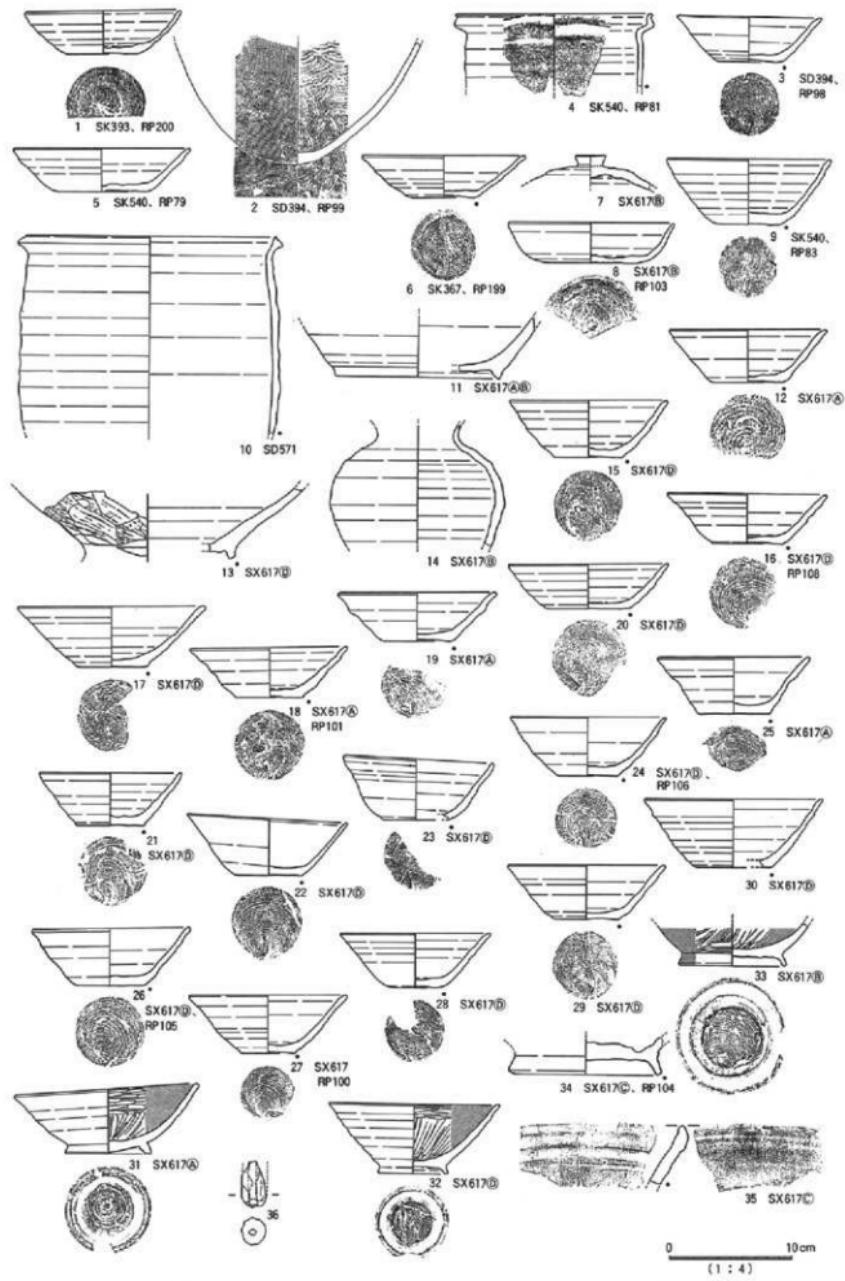
SX617落ち込み遺構の土器組成(第19図7・8・11~35)覆土中位に火山灰層を挟み、その前後から遺物が出土した。図化できたものはあかやき土器壺類を中心に27点がある。あかやき土器壺は17点でB1a~d類までがあり、指数35前後のB1b類(19-20)が主体を占めた。土師器は3点あり、すべて高台の付く黒色土器碗である。内黒の土器は中形品、両黒土器は上半部を欠損する底径9cmの大形品(C2a類)である。須恵器はヘラ切りの壺で底部が広く深身のA1b類と山笠型の甕であった。煮沸具はあかやき土器鍋がある。貯蔵具では甕4点があり、焼きの悪い須恵質で体部球形を呈する中型品や、体部下半に手持ちヘラ削りを施すものあかやきの甕(19-13)、台をナツケにより接着させ底部の



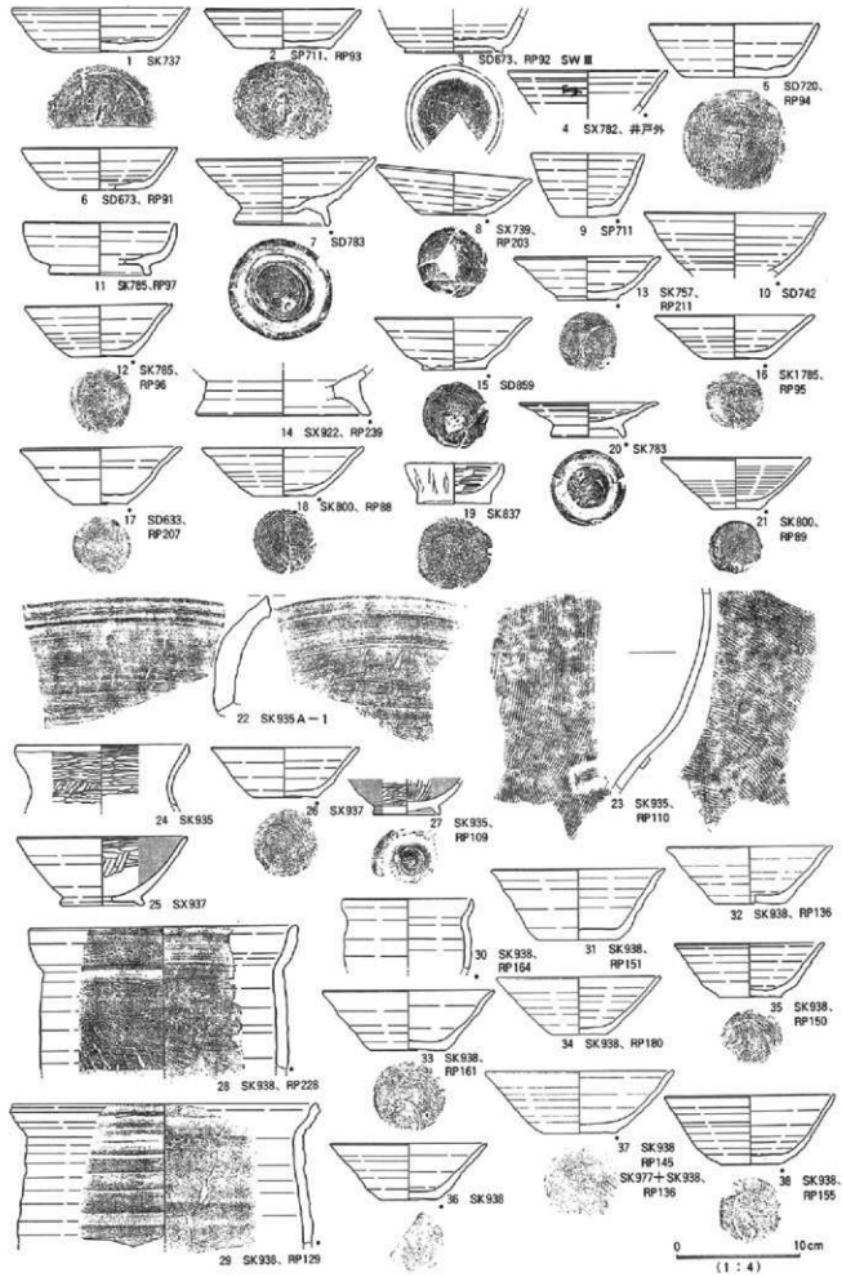
第17図 遺物実測図(1)



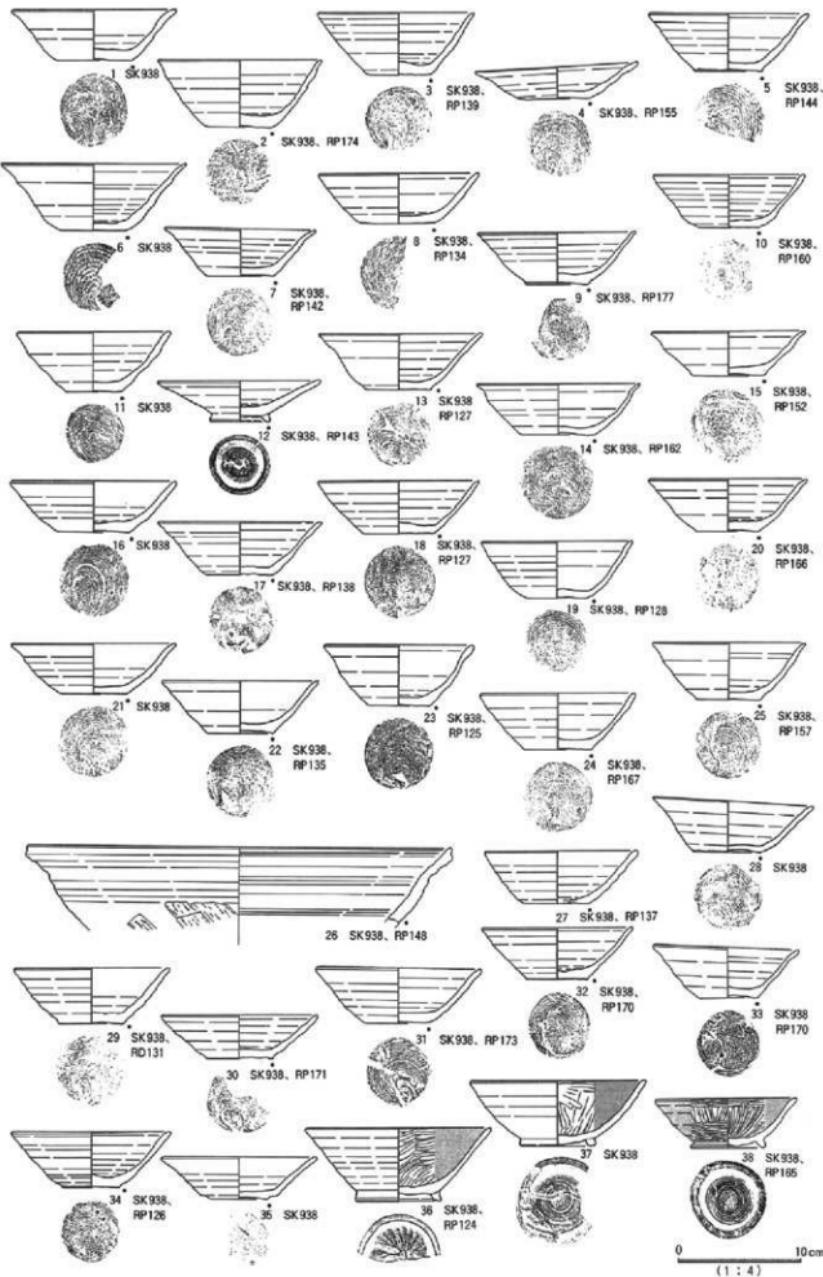
第18図 遺物実測図(2)



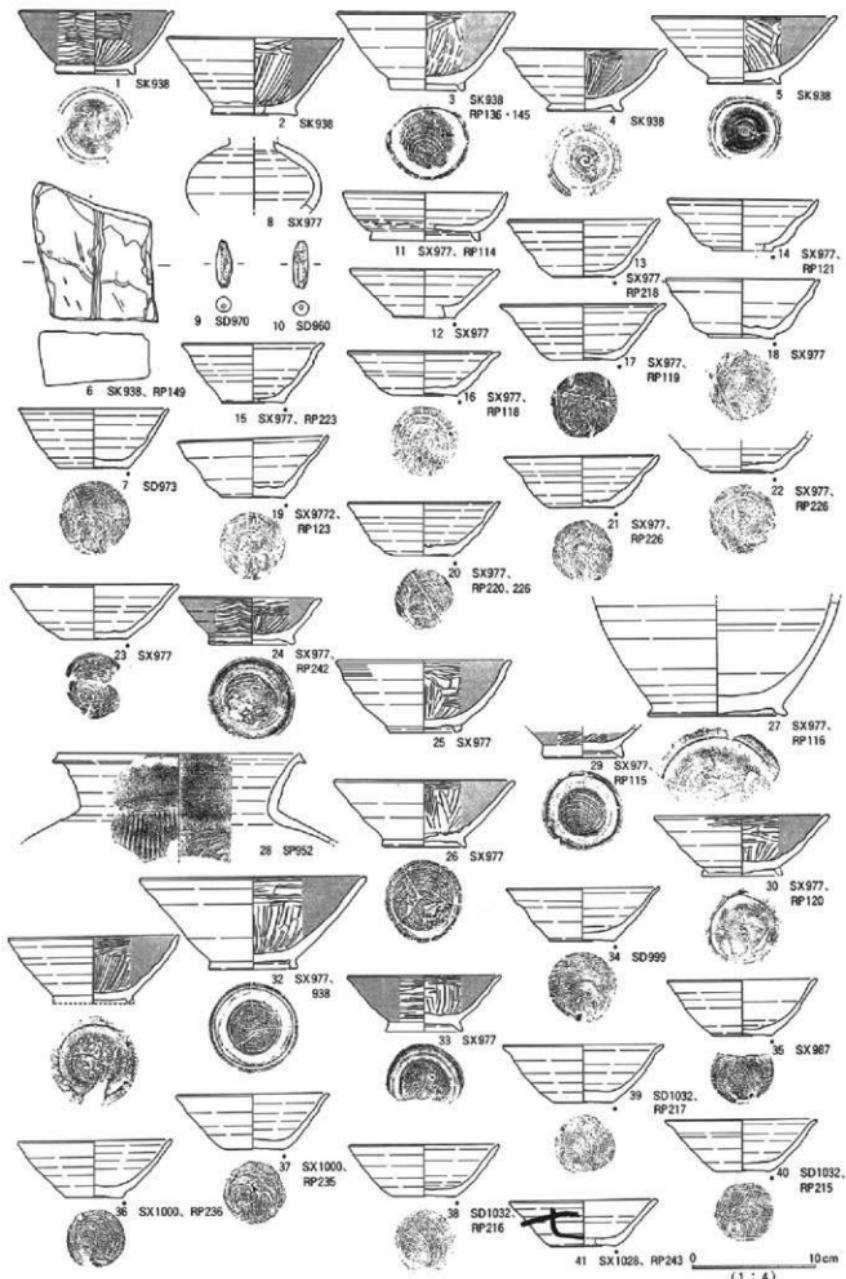
第19図 遺物実測図(3)



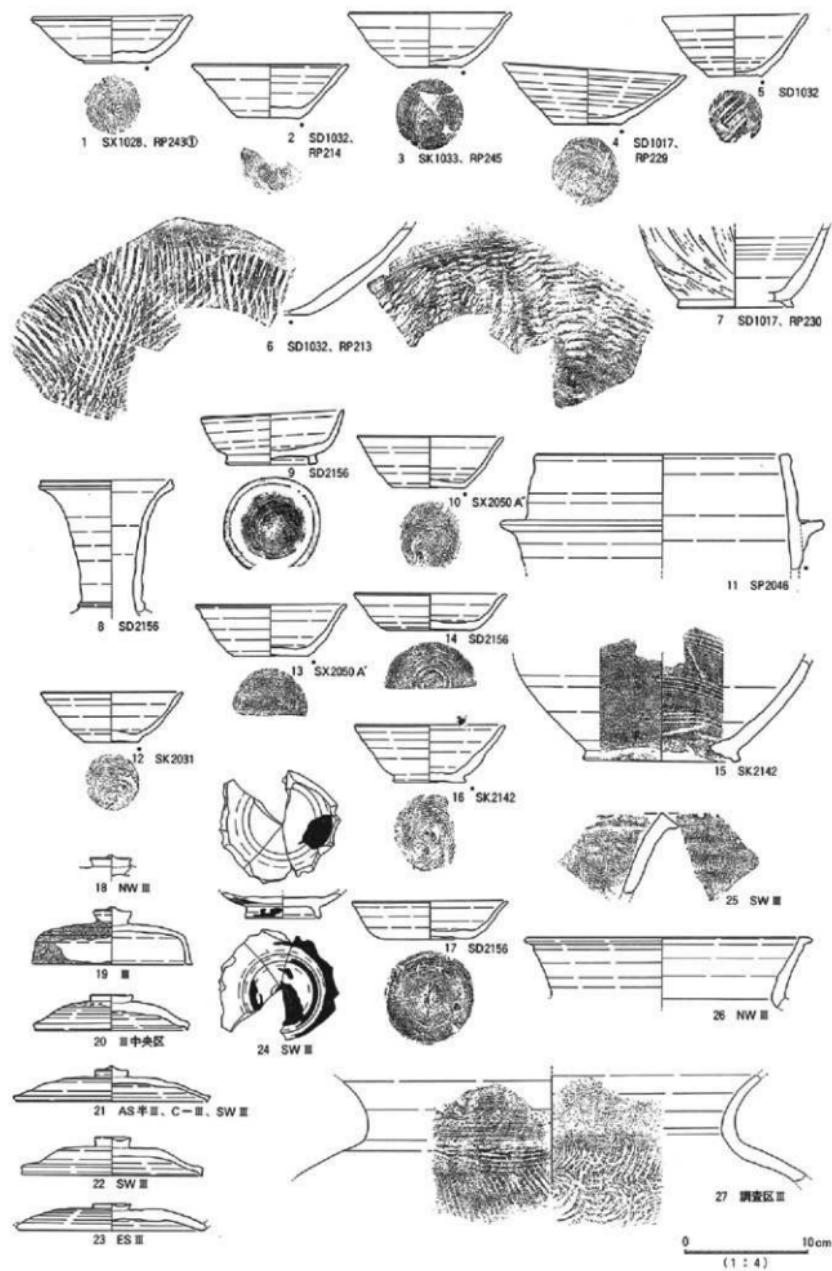
第20図 遺物実測図(4)



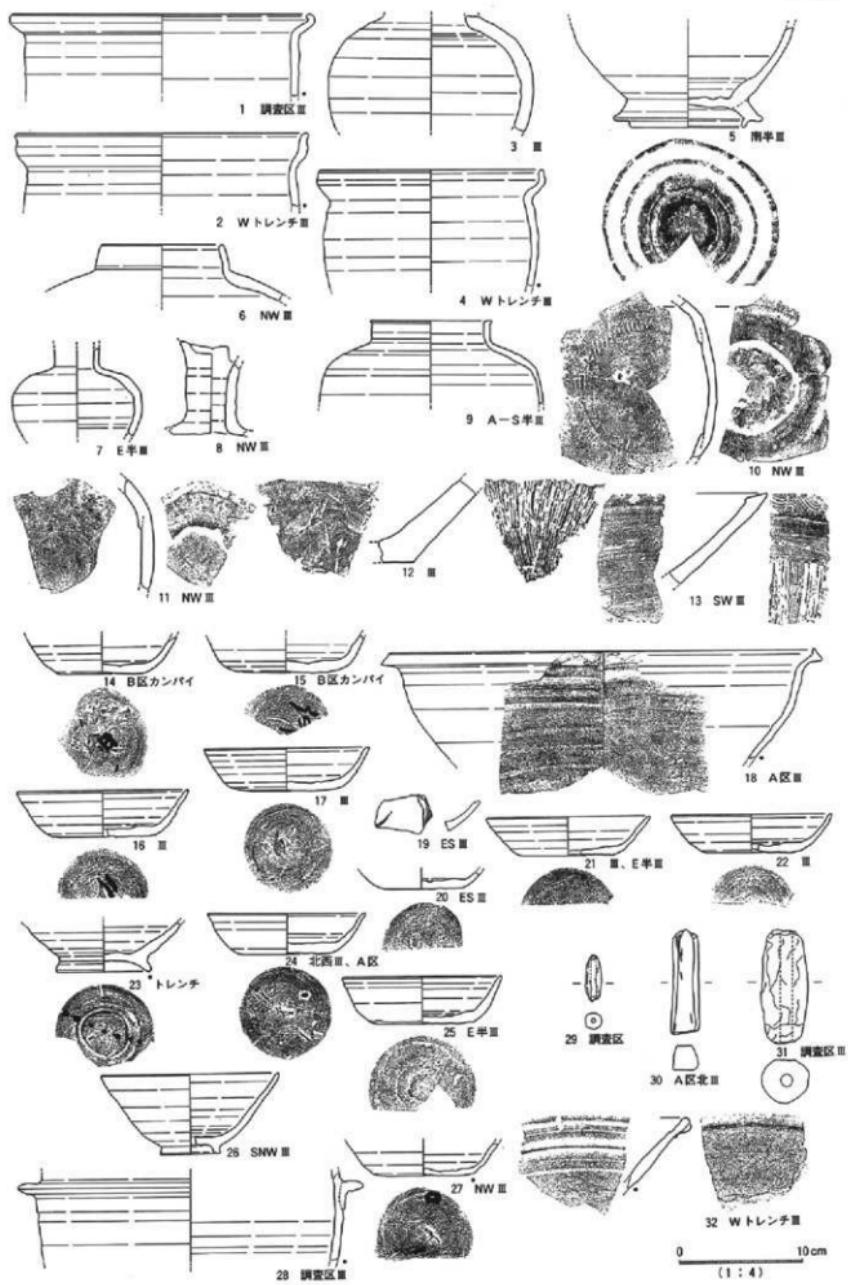
第21図 遺物実測図(5)



第22図 遺物実測図(6)

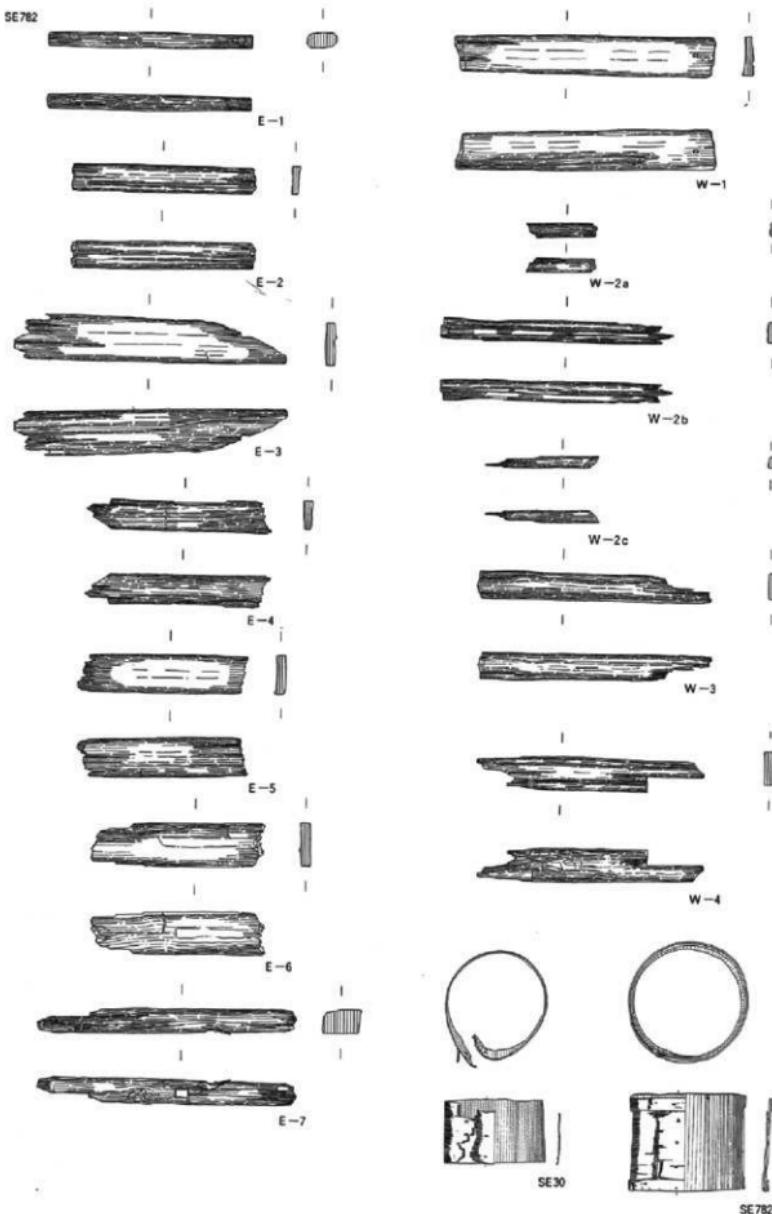


第23図 遺物実測図(7)



第24図 遺物実測図(B)

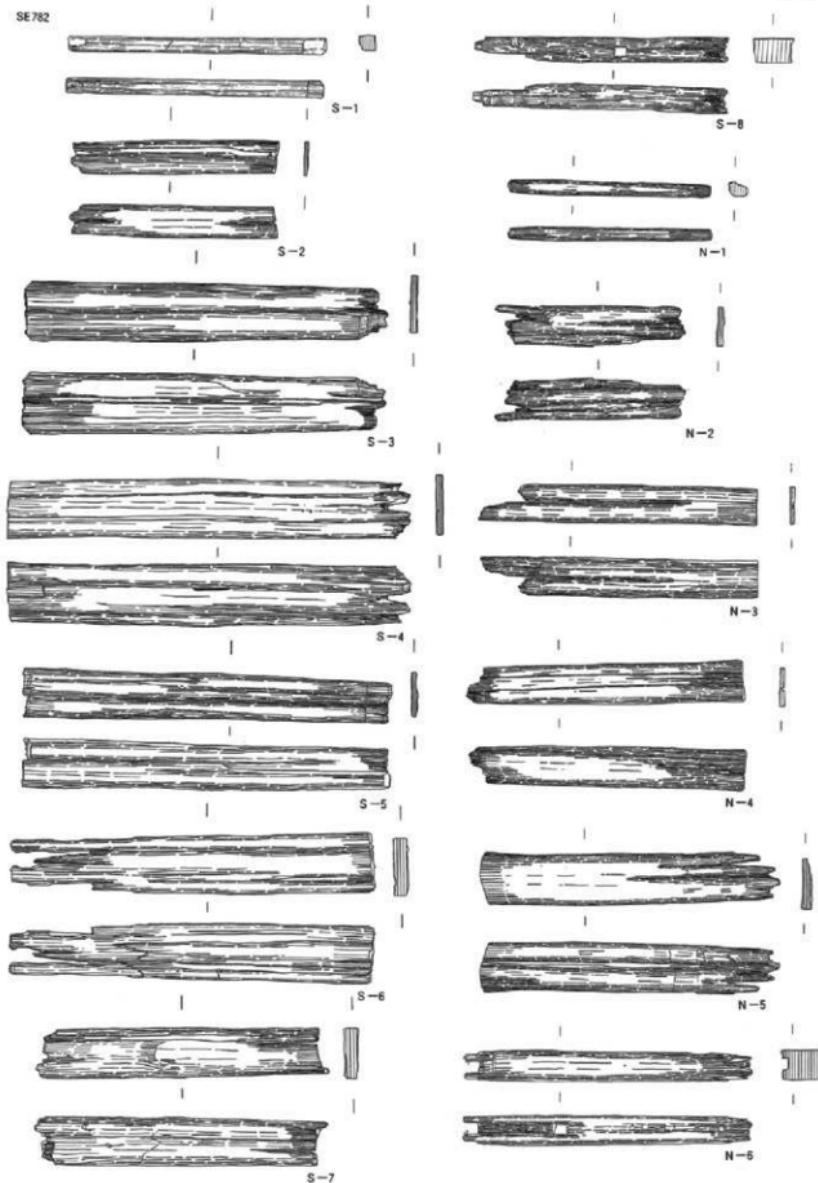
出土遺物



0 50cm
(1 : 20)
第25図 遺物実測図(9)

SE782

出土遺物



0
50 cm
(1 : 20)

第26図 遺物実測図10

切り離し不明の鉢（19-34）などが認められる。組成的にSK938・977に類似の様相と捉えられるが、火山灰の入り方、前記新しい類型の欠落などを考慮すればやや先行する様相と推測される。

SK 7 土壙の土器組成（第17図3～11） 図化できた資料は6点であかやき土器5点と土師器1点である。あかやき土器は壺、高台付皿、壺、鉢、鍋の器種があり、壺類はB1c類やB1d類の器高が更に低下したB1e類（17-6）に近い形態である。高台付皿（17-5）はSK938（21-12）よりも身が浅く口縁部の外反も強い。内黒土器は中形の台付き椀で口縁がやや開く。煮沸具では鉢・鍋があり、口唇の肥厚が無く頸部でやや外傾する程度である。貯蔵具ではあかやき土器の壺がある。

遺構外出土の土器 包含層出土の特徴的な土器としては墨書き土器他が上げられる。底部に「虫」（24-14）、「伴」（24-15）、「二」（24-16）、「白」（24-27）等の字種が認められ、遺構内からも「白」（17-17）、「七」（22-41）などと記されたものが検出された。また、24-23は底部に列点状の墨痕が付く。その他ではK-90後半段階に比定できる縁軸陶器が2点ある。23-24は椀底部で、24-19は椀の体部小片ながら内面に陰刻花文の沈線をわずかに止めていた。他の器種ではあかやき土器の羽釜（24-28）、珠洲系陶器の摺鉢2点（24-12・13）が注目された。

2 木製品・土製品・石製品

木製品はSE30井戸跡の縦板や曲物、SE782井戸跡の縦板と横棟、その他、柱根、SH133出土の箸（17-23～38）等がある。SE30例では腐朽した縦板類を除いて、円形曲物1点を図化し得た。曲物は高さ20cm、直径32cmを測る。蓋が外れ乾燥不良から変形している。SE782例は長さ60cm、幅4～10cm、厚さ4cm程の縦板と3・4cm角の横棟類である。縦板は東西南北の4面に5～6枚で打ち込まれていたもので手斧による整形痕が表裏面共に認められる。横棟はほぞ穴や明瞭な凹状の加工が認められた。曲物は上下にまわしの蓋が廻らされる形態で、高さ32cm、直径38cmの大きさである。なお、へぎ板と思われる板材を伴っていた。SH133より出土した箸は16本で長さは21cm内外、径6mm程の梢円や四角形に削り出して整形し、両端を尖頭とするものである。

土製品では棒状支脚（17-44）や土錐がある。支脚はSX219から出土したもので、脚端部が外向に引き出されて安定を保つ形態である。高さ12.8cm、径5cmを測る。土錐はSD960（22-10）・970（22-9）や包含層（19-36・24-31）から出土している。手捏ねで作られ長さ4cm、直径1.4cm前後の流線形で円孔を持つ。また、長さは不明だが直径が2cm程の中型、長さ9cm代で直径が4cmを測る大型の例も各々認められた。

石製品ではSK938やSX103から出土した砥石がある。石材は砂岩（17-20）、凝灰岩（17-21）、安山岩（17-22）などと考えられ、断面形は長方形や角柱状を呈す。砂岩、凝灰岩製のものでは両側面共に使用による顯著な摩耗痕を認めた。

VII まとめ

調査では建物跡・井戸跡・土坑・畝状溝跡群・落ち込み遺構が検出された。遺物は土坑や落ち込み遺構に係わって多量の土器他が出土し、幾つかの遺構では広域火山灰（十和田a）との直接的関連が窺えた。以下に遺構と遺物の変遷を整理してまとめにかえる。

建物跡は母屋や倉庫跡と考えられる4棟が検出された。これらは検出遺構の中では概して新しい時期に属すると判断されるが、遺構間での重複や遺物相の違いから各々にある程度の時期差が認められる。例えば、SB 1はその柱穴がSK 7を切ることから、本遺跡では最も新しい建物跡の一つと判断されるなどである。また、SB 2の柱穴EB1018がSB 3の柱穴EB875に切られることから、SB 2がSB 3に先行したことが明らかである。年代的にはいずれも10世紀前半で所産と推測されよう。

井戸跡は明瞭な井戸枠を持つSE30・782、素堀りのSE396・708などの4基がある。SE30の掘り方には火山灰のブロックが含まれているなどから、火山灰降下後の構築であることが確実である。また、これら井戸跡と建物跡の分布を勘案すればSB 1建物跡に伴うSE30・396、SB 2・3に伴うSE708・782等の関連が推定され、建物に付随する井戸の在り方とその配置関係が捉えられた。また、本遺跡では特徴的に認められた畝状溝跡群もその分布や走行から各建物跡に伴って存在したと判断できるものである。すなわち、建物跡・井戸跡・土坑・畝状溝跡群等が単位的構成を成し、それら幾つかの集合体が本遺跡の集落を形成していたと言えよう。

一方、遺物相の特徴からは本遺跡の時期的主体が火山灰降下の前後から身の浅い壺や皿類が若干出現しあじめる段階の10世紀中葉頃までと考定された。なお、A区中央部やB区を中心として認められた9世紀前半の須恵器類は、建物跡として積極的に認定できなかった柱根、柱穴群などのより先行する遺構に付隨した一群と推察される。これらを基として以下に主だった遺構の変遷と遺物群の各年代観は、I期：SK304・540・393（9世紀1/4～2/4期）、II期：SK302・SX617（10世紀1/4期）、III期：SE30・SX938、977・SK 7（10世紀2/4期）等に比定される。これらは火山灰を鍵層とする各遺構の新旧と各々の遺物群の年代ともほぼ合致する。

本遺跡の遺構・遺物は上記の概ねII期とIII期が主体をなし、9世紀後半段階での土器相を欠落する。すなわち、I期とII期の間の約半世紀近い空白期が指摘できる。恐らく、月光川や高瀬川など河川の大規模な氾濫などが一つの要因と考えられ、その結果一時的にしろ集落の停廃が生じたと推測される。

最後に、パリノ・サーヴェイに依頼して行った理科学分析結果を記しておく。樹種同定では井戸枠は全てスギ、柱根はクリとする鑑定結果である。また、同資料の放射性炭素による年代測定値は2,890±140y（B.C. 250）で、土器他から推定される相対年代との格差は大きいと判断された。さらに、須恵器の胎土分析では9世紀中葉～後半に操業された平田町山海窯跡群出土遺物との比較を行ったところ、本遺跡出土の須恵器は山海窯跡の粘土成分とは異なる胎土であることが指摘された。

図 版



調査区完掘状況（北西より）



調査区完掘状況（北より）



調査区西半部完掘状況（南より）



調査区中央部完掘状況（南より）



調査区中央部完掘状況（南より）



調査区東半部完掘状況（南より）



調査区北半部完掘状況（南より）



調査区北半部完掘状況（南より）



調査区近景（北東より）



調査区近景（南東より）



粗掘り状況（北より）



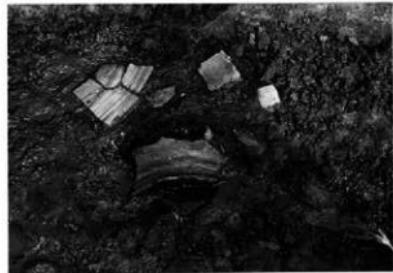
面整理状況（北より）



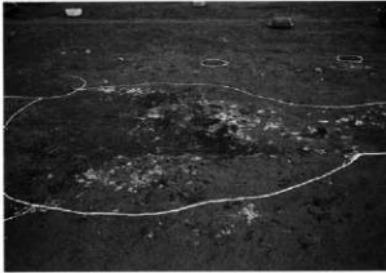
遺構精査状況（西より）



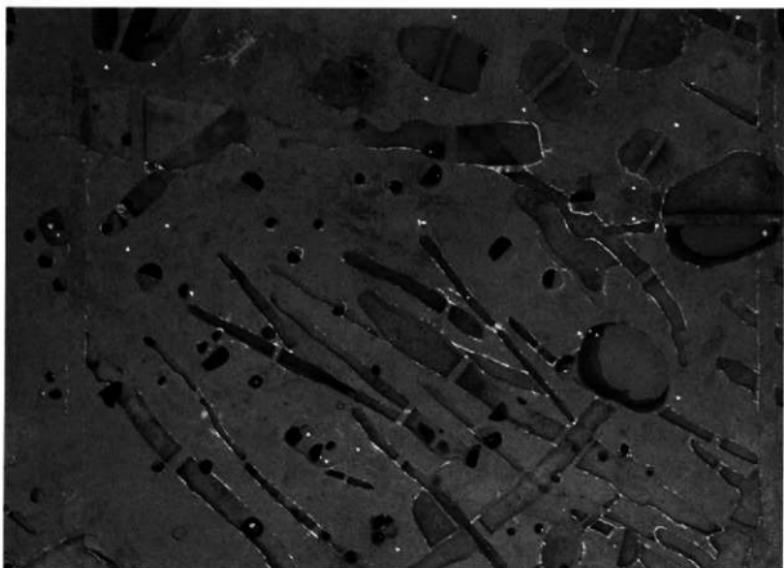
現地説明会（西より）



包含層遺物出土状況（北より）



火山灰検出状況（南より）



S B 1 完掘状況



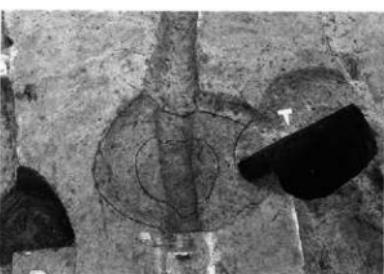
S B 1、E B 22土層断面（北より）



S B 1、E B 602土層断面（南より）



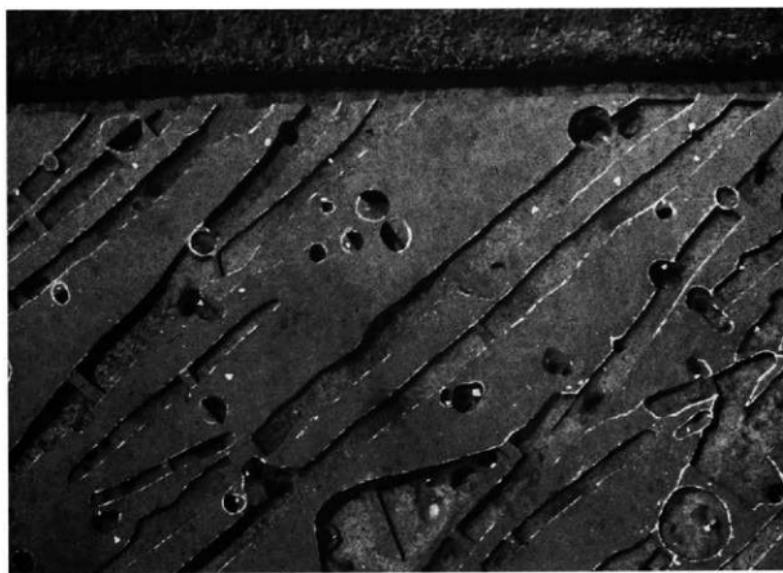
S B 1、E B 605土層断面（北より）



S B 1、E B 613検出状況（南より）



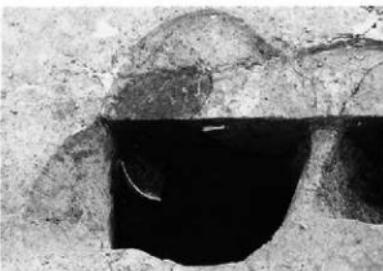
S B 2、3 完掘状况



S B 4 完掘状况



SB 2、EB 752・735土層断面（南より）



SB 2、EB 757土層断面（南より）



SB 2、EB 882土層断面（南より）



SB 3、EB 1006土層断面（西より）



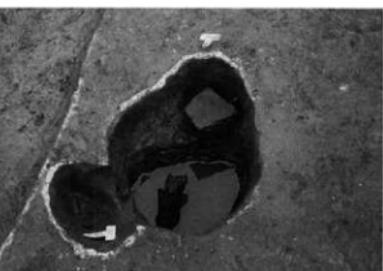
SB 3、EB 875土層断面（西より）



SB 3、EB 1014土層断面（北より）



SB 3、EB 1015土層断面（南より）



SB 4、EB 2046完掘状況（南より）



SE 782完掘状況（南より）



SE 782プラン検出状況（東より）



SE 782井戸壁検出状況（東より）



SE 782完掘状況（東より）



SE 782完掘状況（北西より）



SE 30半截状況（西より）



SE 30半截状況（南より）



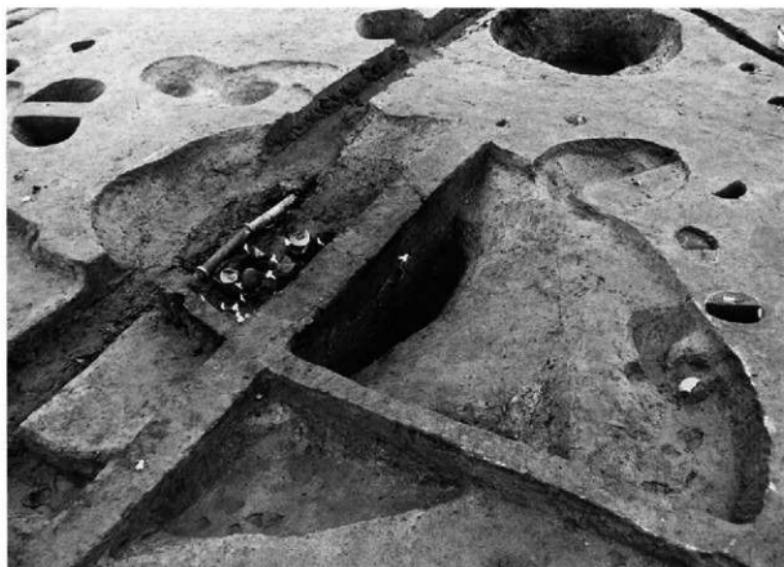
SE 30半截状況（北東より）



SE 396完掘状況（北西より）



SE 708半截状況（南西より）



S K 302遺物出土状況（南東より）



S K 302遺物出土状況（北より）



S K 302遺物出土状況（東より）



S K 302遺物出土状況（西より）



S K 302完堀状況（東より）



S K 304遺物出土状況（北より）



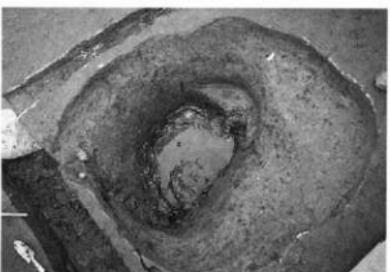
S K 304遺物出土状況（南より）



S K 304遺物出土状況（北より）



S K 304遺物出土状況（南より）



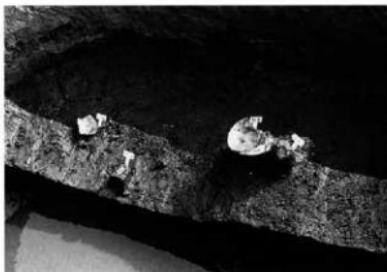
S K 304完堀状況（南より）



SK 7 遺物出土状況（東より）



SK 7 遺物出土状況（北より）



SK 7 覆土 8 層遺物出土状況（北東より）



SK 7 覆土 9 層遺物出土状況（北東より）



SK 7 完掘状況（南東より）



S K 935遺物出土状況（東より）



S K 935完掘状況（北より）



S K 540土層断面（南より）



S K 540遺物出土状況（東より）



S H114土層断面（西より）



S H112半截状況（南西より）



S K 817遺物出土状況（南より）



S K 13土層断面（南より）



S X 988・977遺物出土状況（東より）



S X 938・977遺物出土状況（東より）



S X 938・977遺物出土状況（東より）



S X 937・977遺物出土状況（南東より）



S X 938・977堀り下げ状況（南東より）



調査区西半部歛状溝跡検出状況（南より）



調査区西半部歛状溝跡検出状況（南より）



調査区中央部歛状溝跡検出状況（南より）



調査区中央部歛状溝跡検出状況（南より）



歛状溝跡完掘状況（南東より）



歛状溝跡完掘状況（南東より）



歛状溝跡完掘状況（南東より）



歛状溝跡完掘状況（東より）



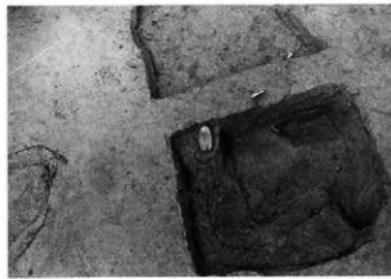
B区完堀状況（南より）



段状遺構検出状況（南東より）



段状遺構完堀状況（南東より）

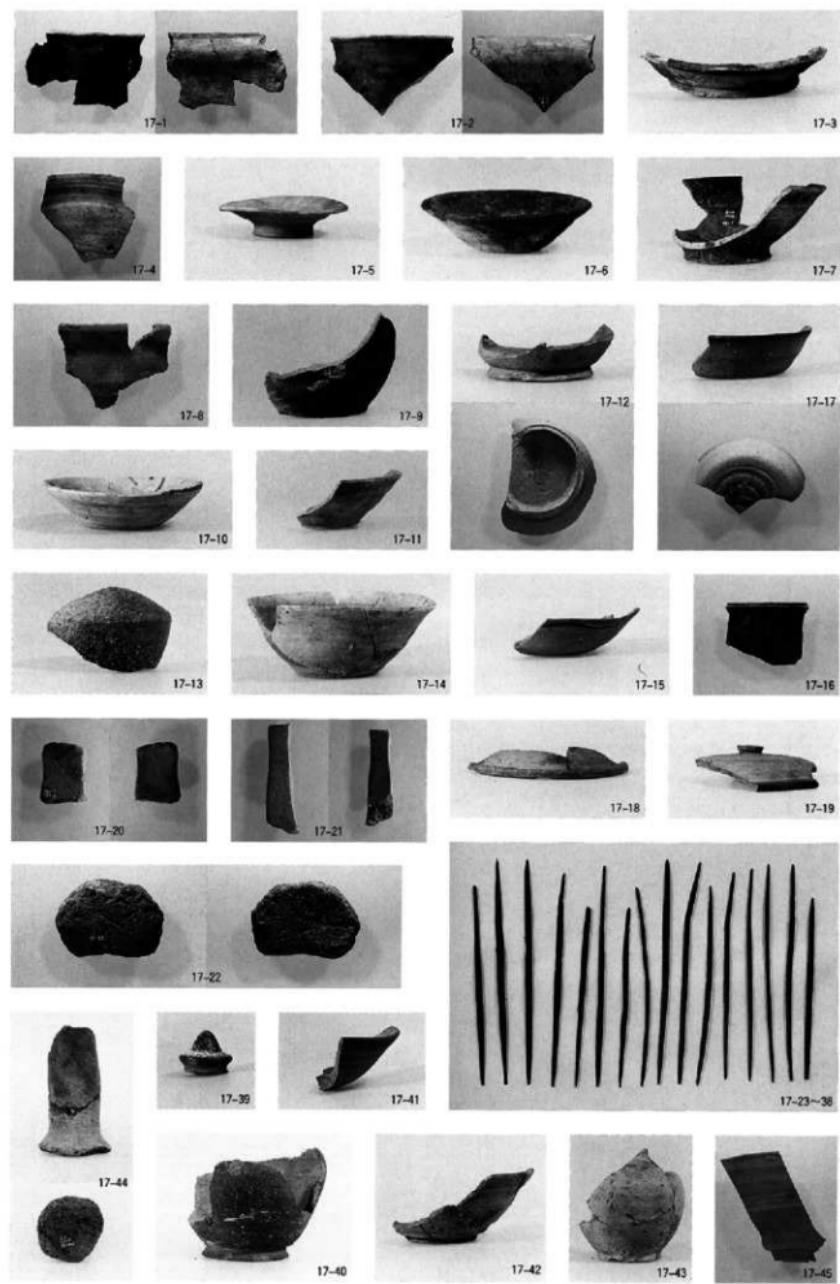


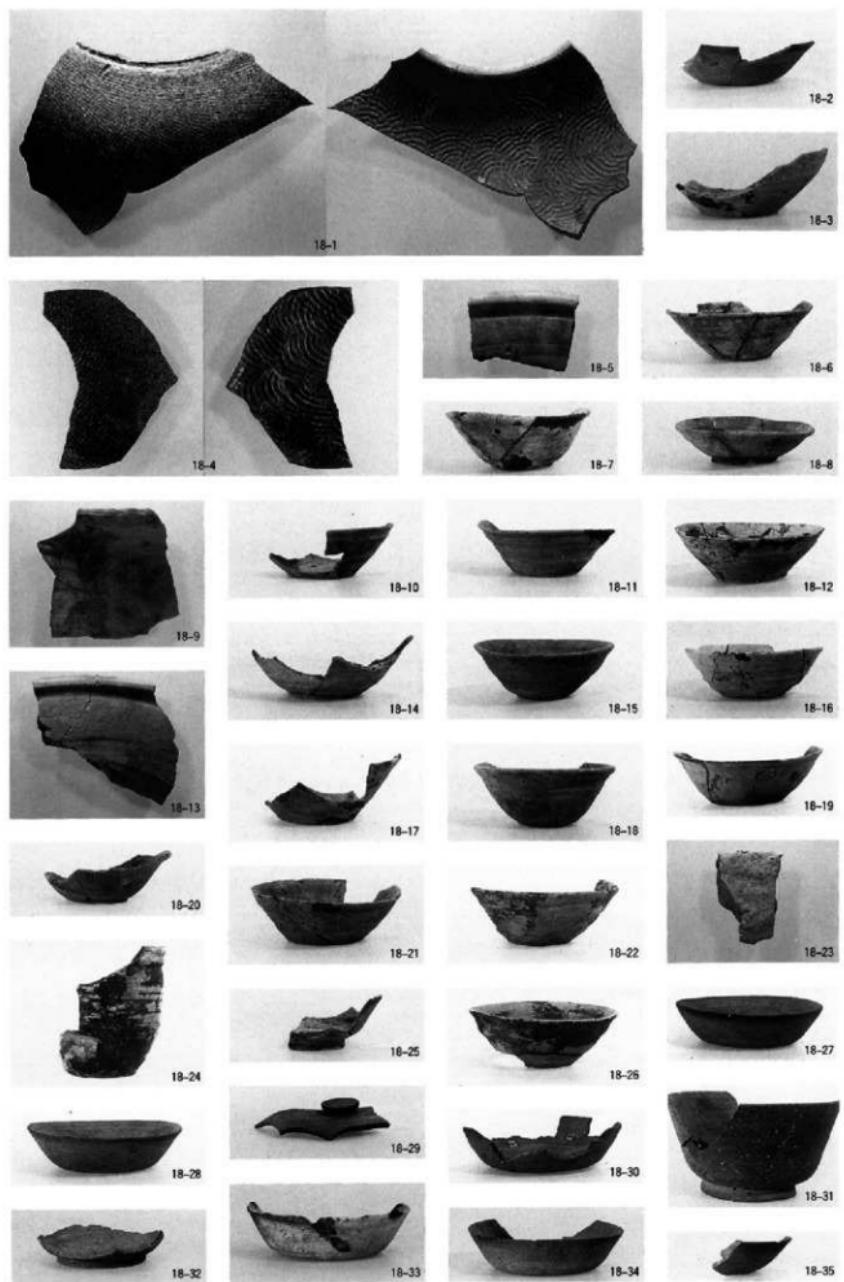
SK 22遺物出土状況（北西より）



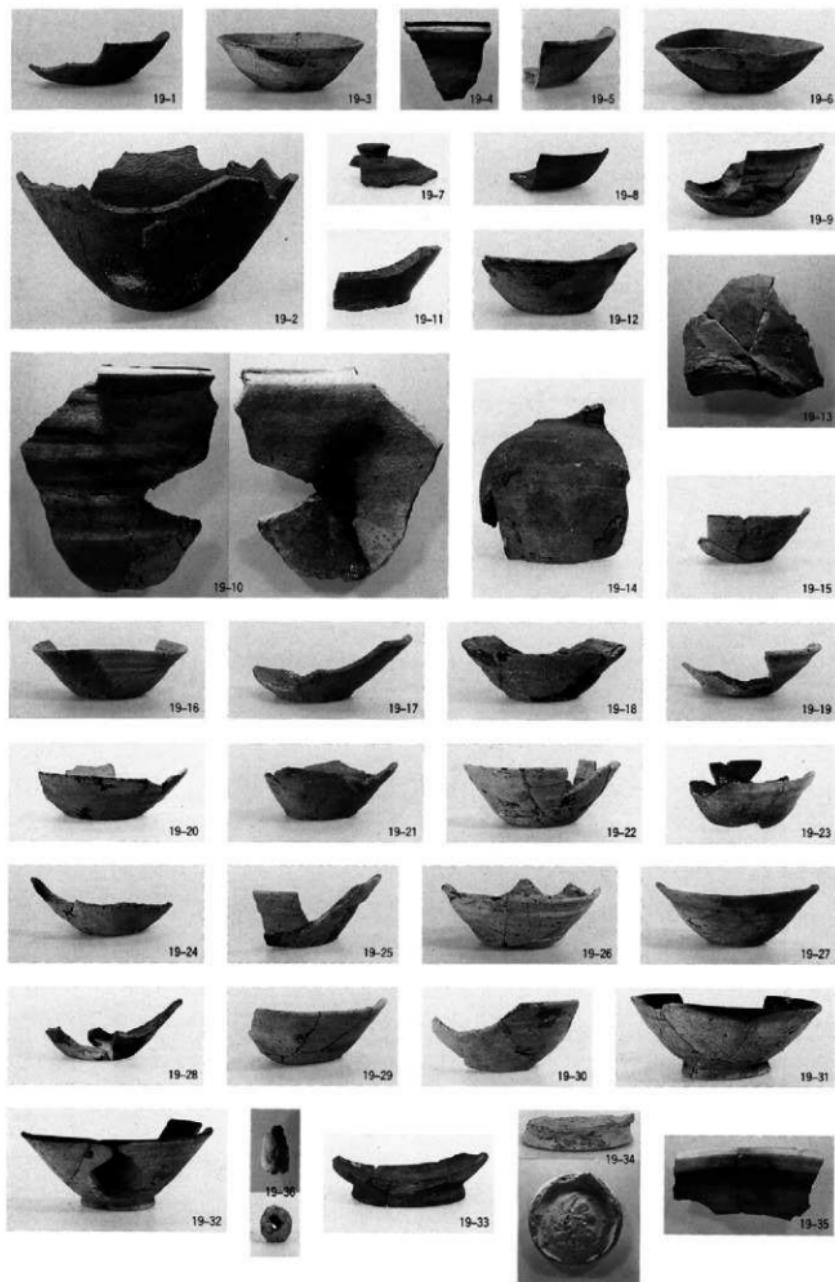
SK 12半截状況（南より）

図版16

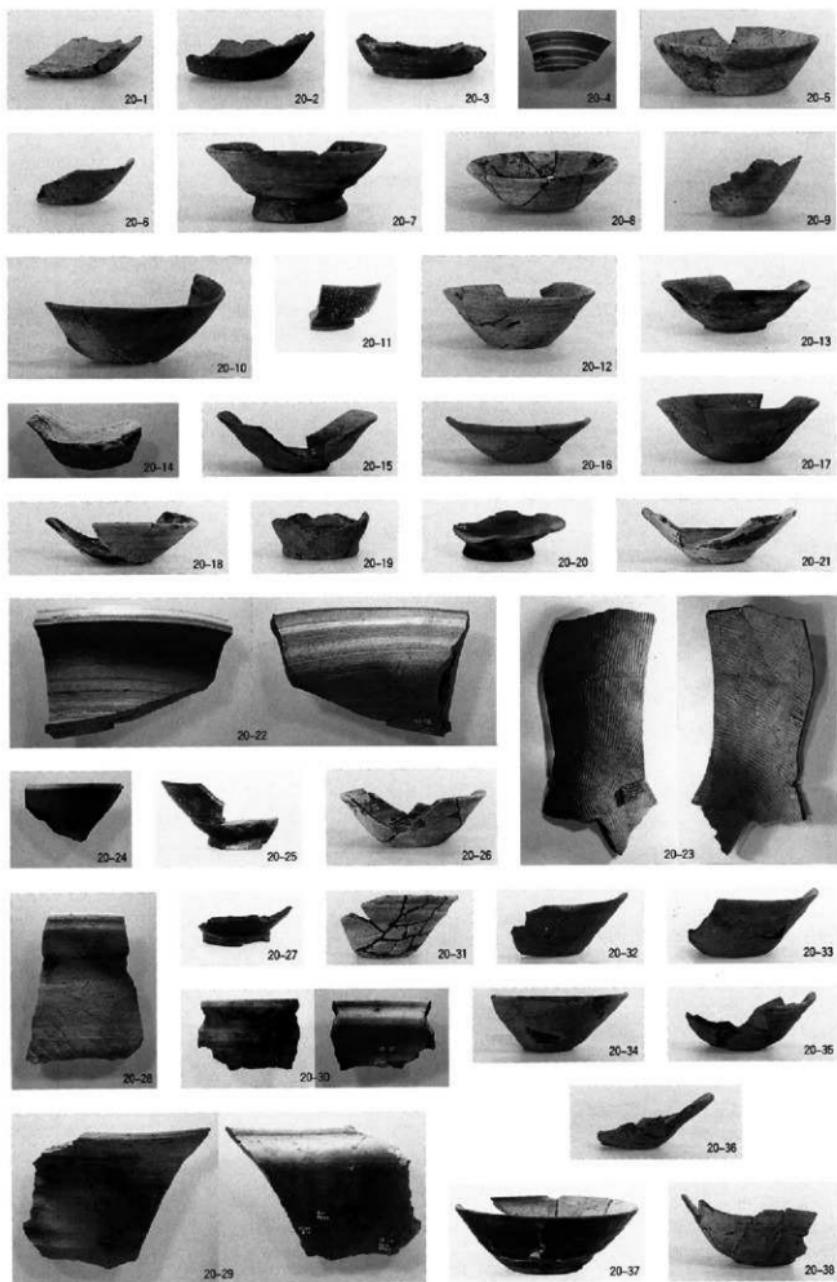




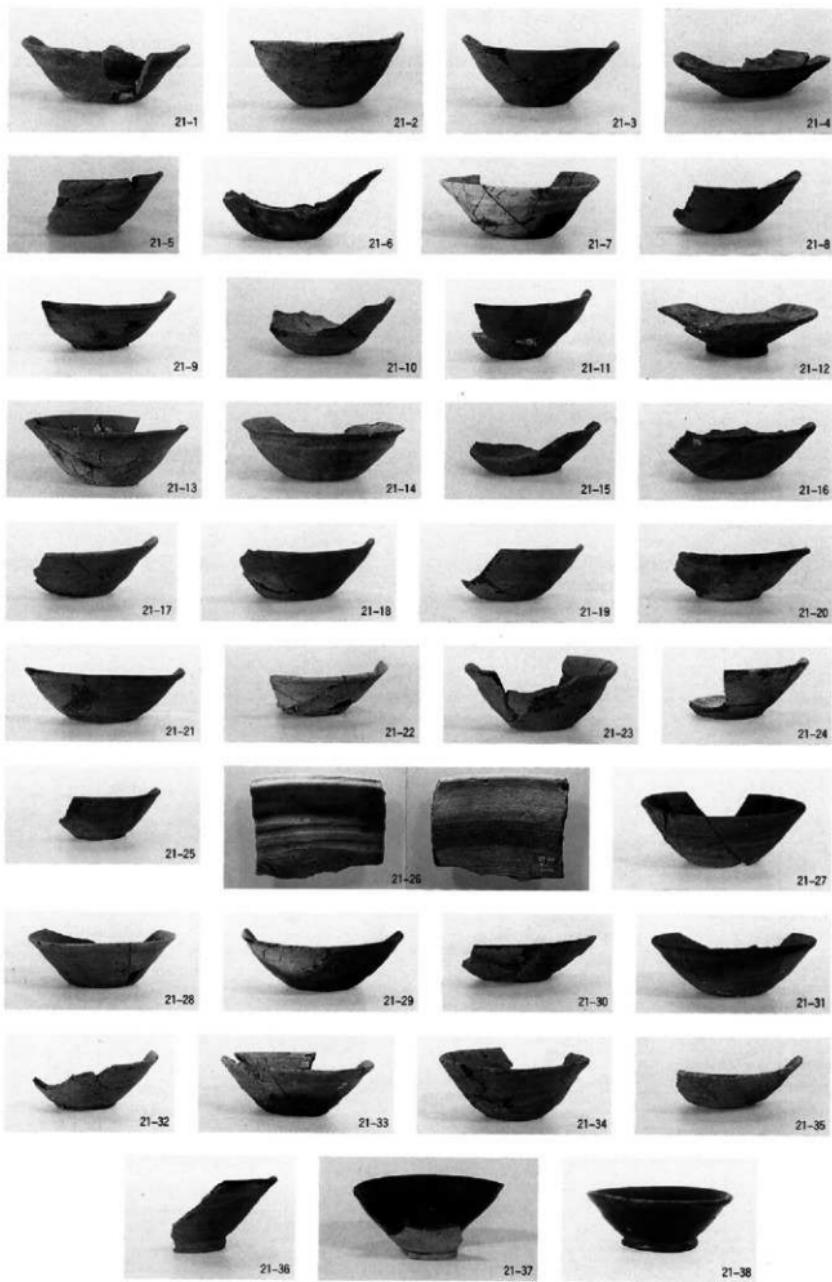
図版18

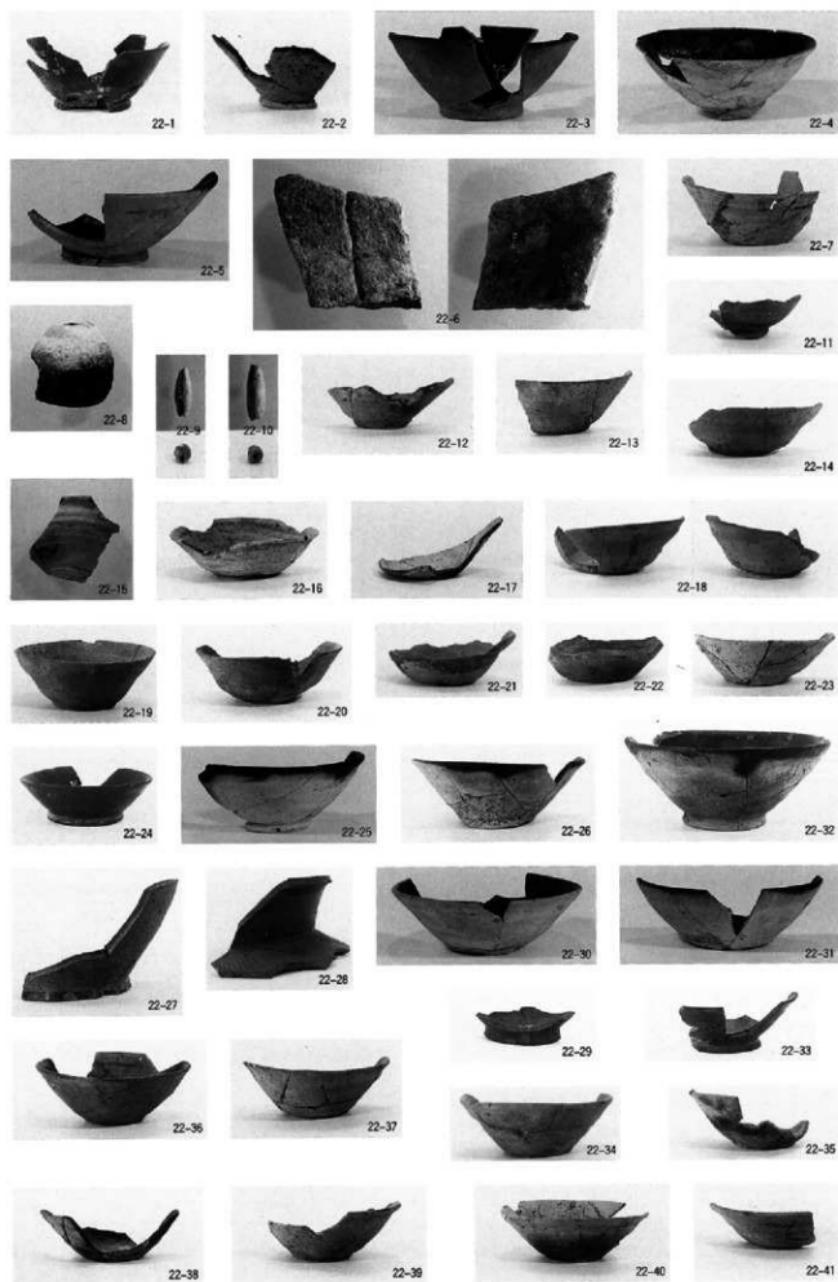


図版19

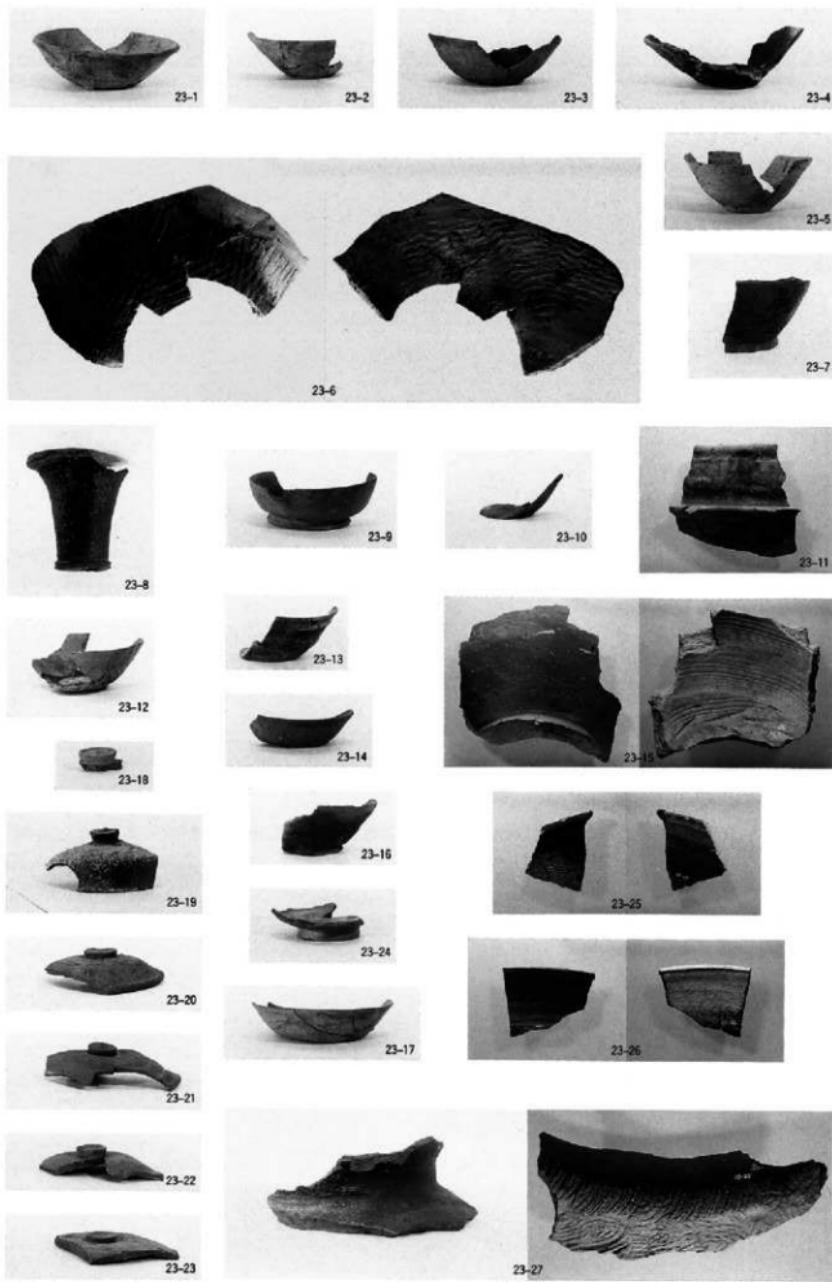


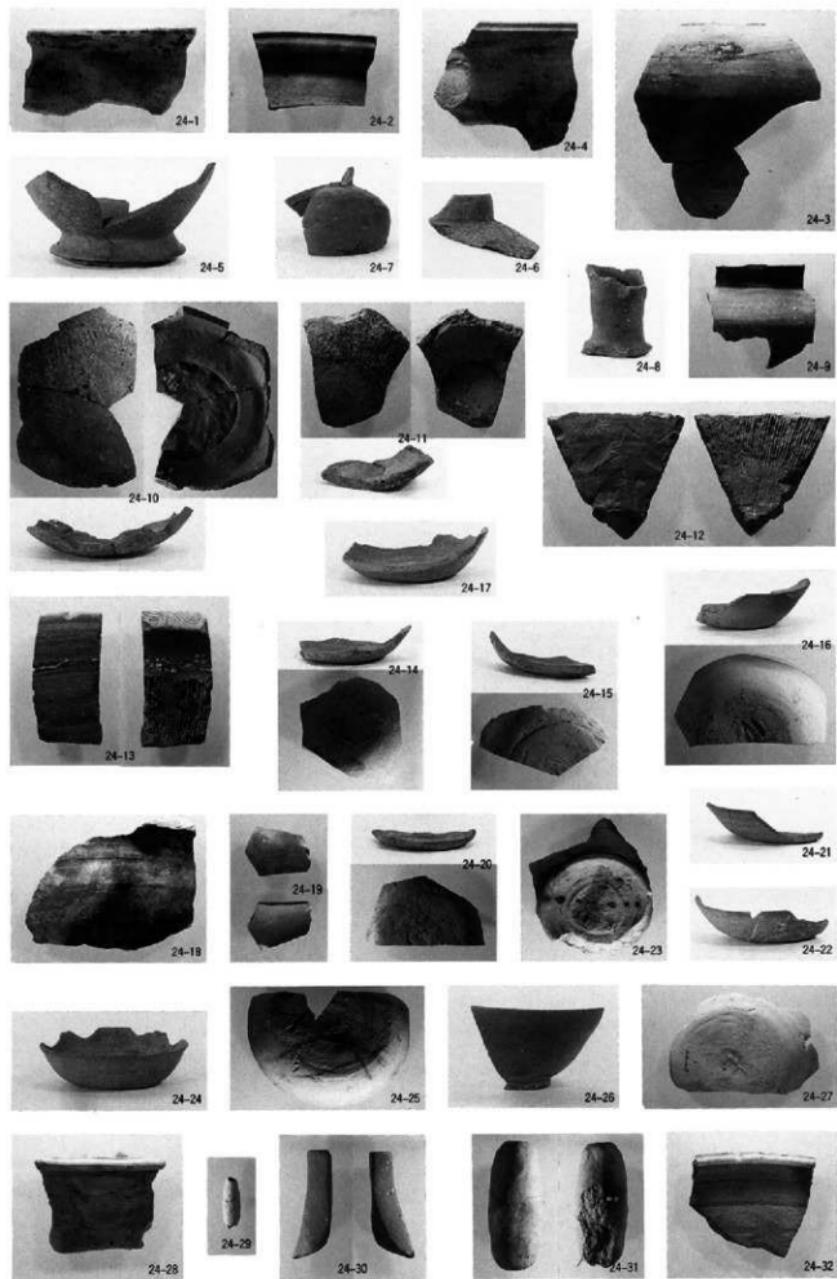
図版20





図版22







E-1



W-1



E-2



W-2



E-3



W-3



E-4



W-4



E-5



E-6



SE-30



E-7



SE792



山形県埋蔵文化財調査報告書第186集

木原遺跡
発掘調査報告書

平成5年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷機大風印刷
